

事業番号	07F001
------	--------

内ヶ島 伸也	看護福祉学部・助教	認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価	認知症高齢者の意思決定に基づく評価方法の検討
平井 敏博	個体差医療科学センター・教授	認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価	義歯装着者(無歯顎患者、多数歯欠損患者など)に対する総合的な咀嚼能力評価法の確立、咀嚼の脳機能に及ぼす影響要因の検討
越野 寿	歯学研究科・教授	認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価	義歯装着者に対する総合的な咀嚼能力評価法の確立
難波 香織	看護福祉学部・助教	認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価	認知症高齢者の意思決定に基づく評価の検討
萩野 悦子	看護福祉学研究科・准教授	認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発	研究計画立案、データ収集、分析、報告
中川 賀嗣	看護福祉学研究科・教授	認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発	研究計画立案、データ収集、分析、報告
西 基	看護福祉学研究科・教授	認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発	研究計画立案、分析
薄井 明	看護福祉学研究科・准教授	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、データ収集、分析、報告
櫻井 潤	看護福祉学部・講師	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、データ収集、分析、報告
花淵 馨也	看護福祉学研究科・准教授	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、データ分析、報告
小野 滋男	看護福祉学研究科・教授	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、文献考察、報告
近藤 里美	看護福祉学研究科・准教授	認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の可能性を探る	認知症高齢者のターミナル期における援助のひとつとしての音楽療法の実践と評価
(共同研究機関等) 井出 訓	放送大学教養学部・教授	地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動	研究の統括、データ収集、分析と考察
池田 光穂	大阪大学コミュニティデザインセンター & フィールドデザイン部門・教授	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、データ分析、報告

事業番号	07F001
------	--------

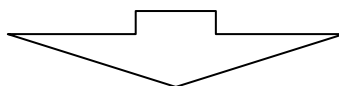
千葉 由美	ペンシルバニア大学看護学部・ビジティング・スカラー	認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価	認知症高齢者に使用可能なエビデンスに基づく嚥下機能の評価方法の検討
-------	---------------------------	----------------------	-----------------------------------

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

研究プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究	看護福祉学部・助教	鹿内 あずさ	生活の場による食行動の特性をふまえた看護援助方法を確立する

(変更の時期:平成20年3月31日)



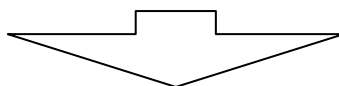
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
看護福祉学部・助教	訪問看護ステーションあいしん		

旧

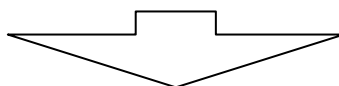
プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価	東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科・助教	千葉 由美	認知症高齢者に使用可能なエビデンスに基づく嚥下機能の評価方法の検討

(変更の時期:平成21年4月1日)



変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科・助教	千葉県立保健医療大学・准教授	千葉 由美	認知症高齢者に使用可能なエビデンスに基づく嚥下機能の評価方法の検討

(変更の時期:平成23年5月1日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
千葉県立保健医療大学・准教授	ペンシルバニア大学看護学部・ビジティング・スカラー	千葉 由美	認知症高齢者に使用可能なエビデンスに基づく嚥下機能の評価方法の検討

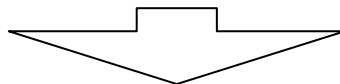
※所属変更

事業番号	07F001
------	--------

旧

研究プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
認知症高齢者の生活世界の 解明とそれに依拠した看護 方法の開発と評価	看護福祉学研究 科・教授	阿保 順子	研究代表者、各研究成果 についての分析とまとめ

(変更の時期:平成 22 年 4 月 1 日)



新

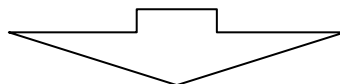
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
北海道医療大学看護 福祉学研究科・教授	長野県看護大学・学長	阿保 順子	研究代表者、各研究成果 についての分析とまとめ

※所属変更

旧

研究プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
認知症高齢者の摂食・咀嚼・ 嚥下機能の評価	歯学研究科・教授	平井 敏博	義歯装着者(無歯顎患者、 多数歯欠損患者など)に対 する総合的な咀嚼能力評 価法の確立、咀嚼の脳機 能に及ぼす影響要因の検 討

(変更の時期:平成 22 年 4 月 1 日)



新

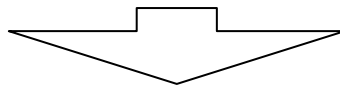
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
歯学研究科・教授	個体差医療科学センター・ 教授	平井 敏博	義歯装着者(無歯顎患者、 多数歯欠損患者など)に対 する総合的な咀嚼能力評 価法の確立、咀嚼の脳機 能に及ぼす影響要因の検 討

※所属変更

旧

研究プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 22 年 4 月 1 日)



新

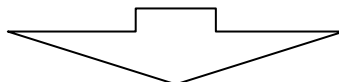
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
	歯学研究科・教授	越野 寿	義歯装着者に対する総合 的な咀嚼能力評価法の確 立

事業番号	07F001
------	--------

旧

研究プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 22 年 4 月 1 日)



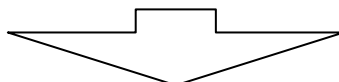
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
社会保険看護研修センター・教育部長	看護福祉学部・助教	川添恵理子	データ分析

旧

研究プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動	看護福祉学 研究科・教授	井出 訓	研究の統括、データ収集、分析と考察

(変更の時期:平成 23 年 4 月 1 日)



新

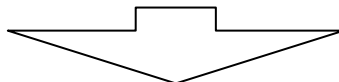
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
北海道医療大学看護福祉学研究科・教授	放送大学教養学部・教授	井出 訓	研究の統括、データ収集、分析と考察

※所属変更

旧

研究プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 23 年 4 月 25 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	研究プロジェクトでの役割
KKR 札幌医療センター・看護師	看護福祉学部・助教	難波香織	認知症高齢者の意思決定に基づく評価の検討

事業番号	07F001
------	--------

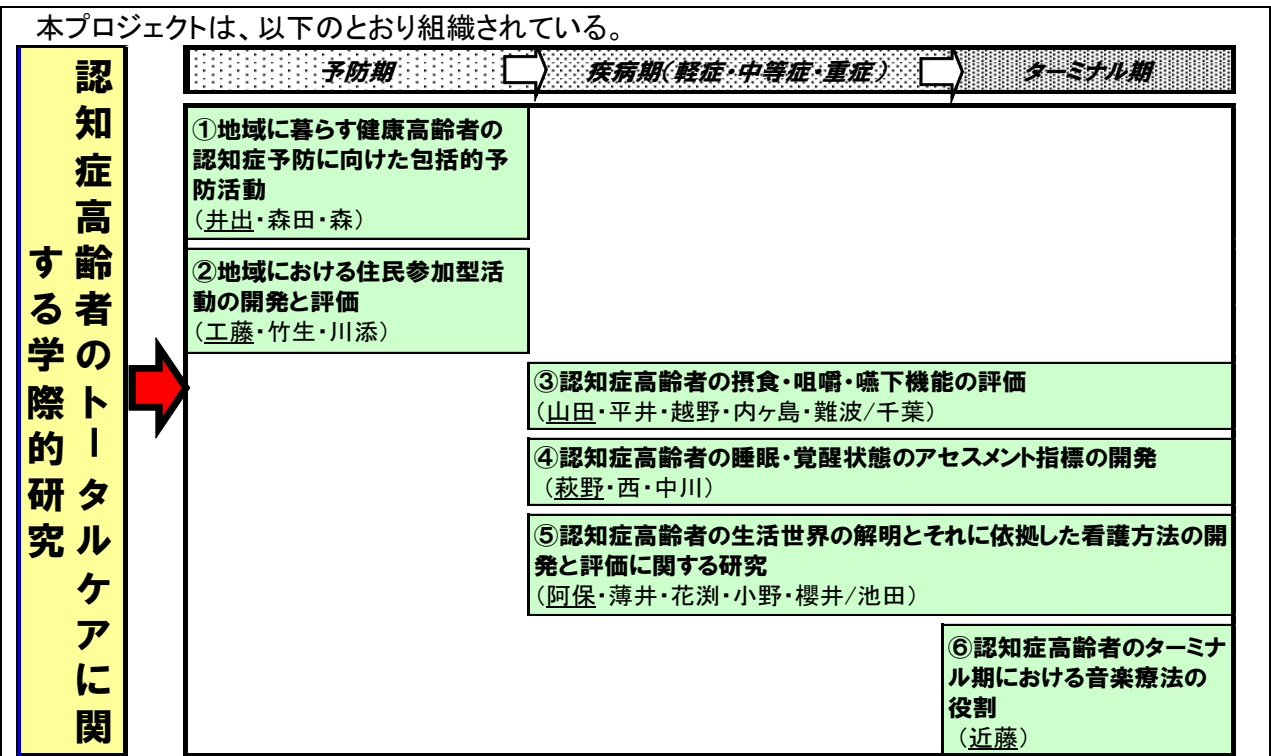
10 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1)事業の目的・意義及び計画の概要

認知症高齢者の研究は、脳生物学的な研究などによって進展しつつあるが、人々の生活という観点にたてば、彼らのケアの方法を確立していくことは必須である。ケアは人と人の間に現象することであり、社会をバックボーンとしている。したがって、ケアは、経済や施策、人間の尊厳といった社会基盤状況の観点、健康な時点を含め予防から疾病期、ターミナル期という時間の観点、ケアが行われる施設や地域という場の観点、ケアにかかわる人々という人的観点からのアプローチが必要である。本研究では、こういった観点からケアをトータルに捉え、21世紀における世界の最重要課題である認知症高齢者のトータルケアを目指す。

認知症高齢者のケアは、本人・家族や地域の人々・専門職者の3者間で繰り広げられている。また、認知症高齢者本人への直接的ケアに関しても、嚥下機能や不可解な行動の意味やそれへの対応など、複雑な要素が絡み合って成立している不明な領域が多々残されている。本研究では、そのような現状を踏まえ、複雑系に属する本人への直接的なケアの方法を開発する。最後に、認知症高齢者のトータルケアの全体図を構成することを目的とする。

(2)研究組織



<研究代表者の役割>

- ①グループによる研究の進捗状況、グループ間の繋がりについて、確認と調整を行うため、全体会議を年に2~4回招集する。
- ②各グループの研究成果と本研究全体の研究成果をまとめる。
- ③各グループの研究者や研究計画の変更がある場合には、研究全体への影響を考え、研究全体に齟齬が生じないように調整して報告する。

<各研究者の役割分担や責任体制の明確さ>

- ①各グループの責任者は、グループメンバーと研究における役割分担をし、研究が滞らないよう、半年ごとにグループ会議をもち、進捗状況を確認する。また、研究成果の報告書を取りまとめる。
- ②各グループメンバーは、研究の役割分担に応じて研究を進め、その問題点や進捗状況をグループ会議で報告する。

<研究グループ間の連携状況>

- ①グループ間の連携は、毎年開催される研究成果報告会において、外部の研究者を交えてディスカッションしている。
- ②研究成果報告会におけるディスカッションで出されたことを参考に、研究代表者が招集する会議(研究成果報告会の後に開催している)において、さらにディスカッションされ、各グループの翌年の研究活動に反映している。
- ③密接に関連するグループ間では、同じフィールドで調査研究し、年に2~3回のグループ連携会議をもつ場合もある。特に、【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】と【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】グループの研究は、睡眠が摂食や嚥下に影響することから、密に連携している。また【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】は、高次脳機能科学的研究との比較検討や、摂食・嚥下機能との関係が重要であることから、今述べた二つのグループとのディスカッションを行っている。

<研究支援体制>

- ①以下の施設が、各グループの研究を継続的に支援してくれている。
北海道医療大学歯科内科クリニック・北海道医療大学病院・北海道医療大学歯学部咬合再建補綴学講座研究室・北海道医療大学動物実験センター・札幌医科大学保健医療学部・グループホームみのり・札幌西円山病院・旭川圭泉会病院等
- ②以下の研究協力者(研究者、大学院生を含む)の支援が継続して得られている。

【地域における住民参加型活動の開発と評価】

若山好美(北海道立千歳保健所)

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】

田中裕子(北海道医療大学大学院看護福祉学研究科看護学専攻 老年看護学分野)
上野澄恵(北海道医療大学大学院看護福祉学研究科看護学専攻 老年看護学分野)
鈴木真理子(医療法人溪仁会札幌西円山病院看護部 副看護部長兼老人看護専門看護師)
平野浩彦(東京都健康長寿医療センター研究所)
枝広あや子(東京歯科大学オーラルメディスン・口腔外科学講座)

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価】

宮地普子(旭川大学看護学部・助教)
白井太一(社会福祉法人 福寿会 藤沢片瀬地域包括支援センター)
中村つむぎ(前西円山病院)
宮本晶(順天堂大学越谷病院)
岡野照美(大阪大学病院)
渡邊智香(倉敷中央病院)
西川勝(大阪大学コミュニケーションデザインセンター)
西村ユミ(大阪大学コミュニケーションデザインセンター)

<共同研究機関等との連携状況>

- ①千葉由美氏(ペンシルバニア大学看護学部)が日本に在住していた平成23年4月までは、学会や研究成果報告会、さらには東京もしくは札幌の出張の機会に直接会って年間5~8回の研究会議を実施してきた他、電話やメールを活用して、研究計画やデータ収集・分析・考察など密に議論を行ってきた。さらに、全国学会学術集会における交流集会やシンポジウムなども共に企画・運営し、本研究の成果を公表してきた。千葉氏が渡米した平成23年5月以降も、skype やメールを用いて1か月に1~6回の頻度で連絡を取り、本研究に関するディスカッションを継続中である。
- ②池田光穂氏(大阪大学コミュニケーションデザインセンター)とは、研究成果のディスカッションを1年に1回行われる成果発表時とその後もたれるグループ会議にて行っている。その他に、データ解釈と考察、単行本の出版などの成果発表に関して、大阪や札幌、長野において、年に1~2回の頻度で会議をもっている。

(3) 研究施設・設備等

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】では、既存の施設・設備を用いて研究を行っている。研究設備の面積：455 m²(北海道医療大学歯学部咬合再建補綴学講座研究室、北海道医療大学歯科内科クリニック、北海道医療大学動物実験センター、北海道医療大学病院、札幌医科大学保健医療学部)

使用者数：15名

研究装置・設備：電子スピン共鳴装置(ESR)(約 32 時間)、Videofluorography(東芝社製 KXO-50N)(約 5 時間)、超音波診断装置(SSD-630, Aloka)(約 5 時間)

(4) 研究成果の概要 ※下記、12及び13に対応する成果には下線及び*を付すこと。

6つのグループ研究からなる本研究は、認知症ケアの全体図を描くことにあった、つまり、予防からターミナル期までの時間軸に沿ったケアのあり方を探究し、それを実際に評価しようとした。予防の時期におけるケアは、健康な高齢者を対象とするものから認知症高齢者の3次予防までを含むべきであるという方向性のもと、具体的には健康高齢者における運動の効果と認知症高齢者外出支援ボランティアの必要性とその効果を明らかにすることができた。このことは認知症予防における地域住民の参加と協働の必要性と一致するものであり、その際の課題と促進するための要因について明らかにできたという点では予防活動についての一定の成果を収めている。認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価においては、睡眠や覚醒の問題と関連して、当初は認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価指標の作成をゴールとしていたが、評価に基づく有効なケアを導くところまで発展させることができ、大きな成果である。また、認知症高齢者の生活世界の解明はかなり進んだものの、進行過程に沿ってどのように彼らから見える世界が変容していくかについては、まだまだ未知の領域が残された。ただ、見える世界に基づいたケアと言う点ではケア開発に結び付いてはいるが、その評価までは進めなかった。ケア開発と評価においては、介護サービスや介護システム、あるいは介護保険などと連動させて実現可能な方法を考えていかななくてはならないことが示唆された。最後にターミナル期における音楽療法の有効性と介護に関わる人々への音楽療法の理解が広がった。以上から、認知症ケアの全体図を示したこと、そして、その中の大きな課題については解明され、具体化され、さらに実用化されている。しかし、認知症の進行という時間経過によって生じてくるケアの課題はいまだ残されている。以下は、各グループの研究成果の概要である。

【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動】(井出・森田・森)

研究開始当初は、「地域に暮らす健康高齢者に対する包括的な認知症予防活動」としたグループ名が示すように、健康な高齢者が認知症にならないための予防策を考え、その効果的なアプローチを運動や脳トレーニングといった視点から明確にしていくことを目標としていた。しかし、認知症の予防を包括的な視点から捉えようとするならば、1次予防から3次予防を網羅する視点があって初めて包括的な予防となるはずである。すなわち、認知症予防を必要としているのは健康な高齢者ばかりではなく、認知症の人であっても2次、3次予防としての予防活動を必要としているのである。しかし、今日の認知症予防に関する多くの研究にはそうした視点が欠落していることに、研究を進める中での議論で気づかされていった。そこで、平成20年度からグループ名を「地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動」とし、1次予防としての運動の効果を検証していくとともに、効果的な3次予防活動の立ち上げと具体的な予防活動の提供を目標に置くこととした。研究の成果として、運動の1次予防的な効果に関しては、継続的な運動が一定の予防効果を示すことが明らかとなった。また、3次予防としての活動は、現在の3次予防目標の設定が認知症の人に即していないことが明らかになり、予防目標の変更と具体的な予防対策としての外出支援ボランティアの要請と派遣とを進めることができた。

【地域における住民参加型活動の開発と評価】(工藤・竹生・川添)

認知症対策において、地域住民の参加と協働をどのように進めるかを明らかにすることが本グループの当初の目標であった。急増する認知症高齢者への対策は、保健医療福祉専門職による支援のみではいずれ資源量に限界が来ることや、認知症高齢者の生活の質の保証の面から、住み慣れた地域で暮らし続けるよう、高齢者を取り巻く地域文化に働きかけることを目指した。

本研究開始時に折良くスタートした国の施策である「認知症を知り地域をつくるキャンペーン」を鑑みて、我が国の「認知症サポーター100万人キャラバン事業」の推進者である認知症キャラバンメイトの活動と意向に焦点を当てる形で研究を遂行していった。これにより、研究目的の地域住民の参加と協働の進め方に関して、地域特性、中でも人口規模10万人程度が活動をしやすいこと(*3,*4)や認知症キャラバンメイトの背景や状況にあった活動の推進要因(*1,*2)を明らかにすることができた。

5年間の研究期間において、はじめの2年間は認知症キャラバンメイトの先駆的活動をしている地域に出向き参加観察とインタビューにより、活動意向が高い反面、負担感や仕事との調整が必要であることを明らかにし(*2)、3年目以降は、北海道という限られた地域ではあるが、認知症キャラバンメイト登録者約2000人の全数調査を実施したことにより、北海道における当事業の活動の阻害、促進要因(*5,*9,*10)を明らかにすることができた。また、これらを北海道庁及び札幌市の担当者に報告、共有したことにより、地域における認知症対策の一助となったことは、当初の研究目標以上の達成であったと考える。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)

本グループの目的は、認知症高齢者のおいしく豊かな食生活の営みを支援するために、認知症の原因疾患や重症度を考慮した系統立った摂食・咀嚼・嚥下機能の評価方法を検討し、それに対応する有効なケアを見出すことである。

事業計画に従って、平成19年度に国内外の文献検討から認知症の原因疾患別にみた摂食・咀嚼・嚥下障害の特徴と評価方法(*11~*13)を見出したほか、嚥下動態(*14~*16)や咀嚼能力評価法(*17,*18)の検討を行った。平成20年度には、全国調査から認知症高齢者の摂食・嚥下機能評価の現状と課題を明らかにすると共に、脳梗塞モデルラットを用いて食形態の違いによる脳機能の影響から咀嚼機能評価のエビデンス(*19~*26)を蓄積した。平成21年度には、作成した評価指標を用いて認知症の原因疾患別および重症度別に摂食・咀嚼・嚥下機能の特徴とケアの方向性(*27)を示し、平成22年度にはこれまでの研究成果をもとにパンフレットを作成(*28,*29)(別添1)し、研究が順調に進行したことから平成23年度に予定していた介入研究を平成22年度から実施することで、平成23年度には実践の場における研究成果の有用性を検討した。このように事業当初の目標は100%達成し、さらに申請当初は認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価指標の作成をゴールとしていたが、評価に基づく有効なケアを導くところまで発展させて研究することができた。

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】(萩野・西・中川)

本グループの目的は、認知症高齢者が良質な睡眠が得られることで、豊かな生活を送れるよう支援するために、認知症高齢者の日中の活動を通じた睡眠・覚醒状態のアセスメント指標を見出すことである。平成19~20年度は、認知症をもつ人に対する睡眠ケアの現在の課題を整理するために、わが国の病院や介護保健施設における高齢者への睡眠ケアについての文献検討を行った(*32)ほか、意識障害のない対象および意識障害のある対象の器質性の行為・動作障害を分類する動作区分を作成した(*33,*34)。平成21~22年度は、近郊の高齢者施設において、睡眠・覚醒障害をもつ認知症高齢者を対象とした睡眠評価を行うとともに、生活の場の光環境調整による睡眠・覚醒リズムの変化とそれに伴い現れた生活上の変化を調査して報告(*35)した。その間に北海道大学の時間生理学の研究者にアドバイスを求め、その示唆をもとに臨床で睡眠状態を測定する際の方法やポイントについて改良している。

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】(阿保・薄井・花淵・小野・櫻井／池田)

本グループの目的は、認知症高齢者の生活世界の解明と看護方法の開発という大きな二つの課題からなっている。

そのため、初年度(平成19年度)は二つの課題を巡る諸問題の整理と、彼らの生活世界の参加観察という二つの研究を平行させて行った。

20年度と21年度は、19年度の整理をもとに各自の課題に沿って、会話分析プロファイルの開発(*36)や日米比較を念頭に置いた地域介護システムと介護サービスの実態とその特徴(*37,*40,*41)、自立を促す時代精神や医療化と脱医療化の問題など認知症をめぐる社会人類学的検討、またグループホームと2カ所の認知症専門病棟での参加観察による中等度から重度の認知症

高齢者の行動や言葉、相互作用などの調査(*38,*39)を行った。

22年度と23年度は、各自がそのまま研究を継続しつつ、認知症高齢者の生活世界について、それぞれ専門の立場から多面的に検討した。その結果、以下のことが解明され、著書や論文として発表された。(*42,*43)

- ①彼らの周囲世界の変容には時間・場所・人の順番によって生じる見当識障害が関与している可能性がある。
- ②認知症の人々は変容した生活世界に対峙するため多くの防衛を行っている。
- ③諸行動の変化や会話の変化は、人間の発達過程、特に幼児期から乳児期における諸現象と類似している。
- ④時間感覚が過去へと遡行していく際には順序性がある。
- ⑤言葉が失われていくには、意味、語彙、ハミング、リズムと抑揚へという順序性がある。
- ⑥相互作用から撤退していく際には順序性があり、「触る」という自己接触行動、「こする」とか「つまむ」などの原初的行動が関係している可能性が大きい。

また、本共同研究では、認知症高齢者の行動や会話が、その本人が生きてきた社会環境や人間関係、文化的背景からの多様なヴァリエーションとして、一定のパターンや傾向性をもつものとして分析できることを明らかにした。人類学者らとのコラボレーションにより、これまで阿保が進めてきた認知症高齢者の生活世界の構築性を解明する方法をさらに有効性をもつ具体的な分析手法として確立したことが、本共同研究のもう一つの成果である。

【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割】(近藤)

音楽療法士や医療福祉従事者からのアンケート調査から、認知症高齢者への音楽療法の現状を把握したことにより、それぞれの現場で求められている課題を発見することができ、それに沿った音楽療法の啓蒙・啓発活動を具体的に実施することができた。また、ターミナル期にある認知症高齢者に関わる音楽療法士をはじめ、医療福祉従事者や介護者たちが、共に具体的な音楽療法的な関わりに関する検討を積み重ねたことにより、様々な人的・物質的リソースを共有することができたと同時に、音楽療法が当事者である認知症高齢者だけでなく、ケアする人へのケアにも役割を果たすことができることが明らかとなった。

<優れた成果があがった点>

【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動プロジェクト】(井出・森田・森)

予防医学における1～3次予防の視点の中で、認知症の予防対策においては3次予防の目標設定が現実に即していないことが明らかになり、独自に「認知症の症状が安定し、自立した生活が送れる」といった予防目標の設定と、そこに向けた具体的な支援活動を展開した。認知症の人が認知症であるためにできなくなっている活動を、同じ趣味を持つ友人がサポートする活動支援の提供をはじめ、3次予防として認知症になった後の生活の質を豊かにする支援の在り方を検討することができた。

【地域における住民参加型活動の開発と評価】(工藤・竹生・川添)

認知症の人が暮らしやすい地域づくりをめざす認知症キャラバンメイトの活動のあり方を明らかにするために、初年度の平成19年度から2年間は(1)先駆的活動地域(2市町)におけるキャラバンメイトのフィールドワーク及び面接調査を実施した。引き続き、平成21年度から3年間は、(2)北海道における認知症キャラバンメイト登録者の全数調査とその分析を行った。

- (1)2市町における認知症の啓発活動や認知症キャラバンメイトの自主組織への参加観察と認知症キャラバンメイトへの面接調査を行った。質的な分析を行い、活動の実践者の活動意向やその要因(*2)を明らかにし、公表することができた。これらの活動への参加観察とその公表が、近隣市町村のキャラバンメイトの新たな組織化へと波及していった。研究の成果が実践に波及していったことは、当初の研究の目標以上の成果であった。
- (2)北海道における認知症キャラバンメイト登録者の調査として、北海道及び札幌市の認知症対策部門の責任者、担当者の理解と協力の下、認知症の啓発と町づくりを担う「認知症キャラバンメイト」に関して、全道と札幌市の登録者の全員(約2000人)への悉皆調査を実施し、全道の認知症キャラバンメイトの活動状況と意向を明らかにした。例えば、認知症キャラバンメイトが組織化されているかという

地域の差(*6,*7,*8)、人口規模や保健福祉計画における認知症対策の位置づけなど地域特性による活動の状況(*3,*4)、キャラバンメイトの活動への意欲、負担感が異なること(*5)を統計学的分析から明らかにした。また、キャラバンメイト登録者による活動の自主組織、行政とキャラバンメイト組織のパートナーシップが重要であること(*6,*7,*8)を自由記載の質的分析から明らかにした。さらに、認知症啓発の活動を推進する要因と阻害要因という視点から分析し、活動目的の明示やキャラバンメイトの組織化、地域毎の事業計画をもつ重要性、無理のない活動が長期的な継続につながることなど活動促進のための具体的な方策を明示できた(*9,*10)。研究結果から示唆された活動のあり方に関する提言を含む報告(*1~*5)を北海道と札幌市に行き、認知症対策部門担当者と情報交換の場を持ち、今後の対策のあり方について共有する機会を持ち、対策につながる実践的な研究を進行した。また認知症の啓発と対策を担う全国の統括機関である「特定非営利活動法人地域ケア政策ネットワーク全国キャラバンメイト連絡協議会」と「認知症介護研究・研修センター」への結果報告も行った。

- (3)本研究メンバーの竹生は、平成 22 年度より、認知症についての理解を広げるための地域住民への講話を 3 市町村で実施している。より実践的な介入研究へと発展しており、本事業が終了した後も、引き続きアクションリサーチを継続する予定である。地域住民への介入とその前後の変化を明らかにし、認知症の方と家族への理解を広げ、暮らしやすい地域づくりという当初の大目標にむけての研究の継続と発展は本研究グループの成果といえる。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)

- (1)本研究成果である脳機能を考慮した認知症高齢者の摂食機能のアセスメントと食事支援方法が、NHK「おはよう日本」(平成 21 年 10 月)(*30)で取り上げられ、全国の住民や専門職から問い合わせや講演依頼が急増した。さらに、平成 22 年度に研究成果の実用化と介入研究に向けてパンフレット(別添1)を作成した結果、NHK「ニュースウォッチ9」(平成 22 年 5 月)(*31)で取り上げられ、2 人のアナウンサーからも重要な研究とのコメントが付され、再び問い合わせや講演依頼が殺到し、現在も全国各地の住民や専門職を対象に、本研究成果に基づく講演による啓発活動を月に 1~3 回ほど実施中である。
- (2)本研究成果を発表した結果、平成 20 年 6 月の日本看護研究学会北海道地方会で研究奨励賞を受賞、平成 19 年 10 月と平成 22 年 10 月の 2 回、日本認知症ケア学会大会で石崎賞(学会賞)を受賞した。

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】(萩野・西・中川)

活動性の低下した認知症高齢者の睡眠を評価する際に、スタッフの観察による睡眠・覚醒状態と活動量計での計測から判定された睡眠・覚醒状態には違いがあり、スタッフによる観察の方が認知症高齢者の睡眠・覚醒状態にメリハリがあると判断していることが明らかになった。また、睡眠・覚醒状態が食事摂取の自立と嚥下状態への影響が大きいことがわかり、認知症高齢者の食事援助ポイントの根拠の一つとしての意義が見いだせた。加えて、生活の場の光環境調整による睡眠・覚醒リズムの変化とそれに伴い現れた生活上の変化を日本認知症ケア学会大会で報告したところ、実際に介護に携わっているケアスタッフからの反響があり、評議員から学会誌への投稿の推薦を受け現在執筆中である。

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】(阿保・薄井・花渕・小野・櫻井／池田)

- (1)認知症の医療化と脱医療化の観点から、医療化にまみれた認知症という言葉を「ぼけの復権」という形で日常に取り戻すことの必要性について、また、認知症を患う人をトータルにみる実践についての理念に関する一定の見解を著書としてまとめることができた。(*43)
- (2)研究成果により、見当識障害、特に時間的な遡行や言葉の喪失、相互作用からの撤退などには順序性があることが解明できたことにより、認知症の経過に沿ったケアが可能になることは大きな成果である。これらの成果が論文や著書として発表されたことにより、講演やシンポジスト依頼が多くなり、多くの人々に認知症の人々の生活世界に沿ったケアを啓発できた。さらに、著書(*42)が注目され、共同通信の記事「こころはいつまでもー認知症の人々の世界」というタイトルで、15 回にわたり連載した。(*45)
- (3)会話の問題では、会話能力保存レベルの測定へ、介護システムや介護サービスに関する研究にお

いては高齢者と認知症高齢者の実態の比較へと、次の研究への可能性を拓くことができた。

【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割】(近藤)

認知症高齢者に関わる医療・保健・福祉従事者や家族を含めた介護者への音楽療法の啓蒙・啓発活動を目的とした勉強会から、認知症高齢者への音楽療法の様々な方法の理解が広がったことがアンケートを通じて明らかになった。これは、それぞれの場所のできる療法的な視点をもつ具体的な音楽の提供を促すことに繋がった。また、臨床実践する音楽療法士と家族を含めた介護者による継続的なコミュニケーションを通じて、音楽療法の場が、ターミナル期にある認知症高齢者のためだけでなく、意思疎通が困難な状況である高齢者と介護者を繋げるとともに、ケアする人たちのための「ケア」の役割を担っていることがわかり、ケアする人のストレス軽減に役立つ可能性が示唆された。

<問題点>

【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動プロジェクト】(井出・森田・森)

3次予防への取り組みを進められた一方で、1次予防としての運動の効果に関しては、当初予定していた評価方法がうまく機能しなかったこと、また、新たな評価指標として導入を検討していた評価尺度が、技術的に熟練を要するものであったことから、こちらもうまく機能していかなかった。また、3次予防として展開を進めている活動の予防効果の測定が、調査期間内に行えなかったことは、今後の課題である。

【地域における住民参加型活動の開発と評価】(工藤・竹生・川添)

いずれの調査も北海道及び札幌市という限定された地域が対象の調査であり、全国の状況に一般化することには問題が残る。また北海道の認知症対策部門の理解と協力の下、「認知症キャラバンメイト」に関する全道の悉皆調査を実施したが、転居、記載不備があり、有効回答は約50%であった。そのため、分析結果は、あくまでも有効回答者による回答に限られたものである。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)

介入研究は、認知症高齢者の食事場面はじめ摂食・咀嚼・嚥下機能を詳細に評価して行う研究のため、対象数が少ないことによる限界がある。特に、レビー小体型認知症と前頭側頭型認知症と診断された対象が少ないことから、さらなる事例の蓄積が必要である。

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】(萩野・西・中川)

介入研究は、認知症高齢者の介入前と介入後の長期にわたる観察と機器による測定から詳細な分析を要する研究のため、対象数が少ないことが今回の課題である。したがってさらなる事例の蓄積が必要である。

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】(阿保・薄井・花渕・小野・櫻井／池田)

19、20年度においては、認知症高齢者において、身体合併症が彼らの生活世界に及ぼす影響に関する問題が浮かび上がってきたが、21年、22年には、高次脳機能科学、社会学、医療人類学、哲学など専門的立場から多面的な解釈が行なわれたことによって多くのことが解決された。一方で、場所の見当識障害と空間認知の関連性、原初的行動の脳機能科学的解明の可能性、子どもの発達過程と認知症の進行による行動変化との関係など、彼らの生活世界においては未解明なことがあまりに多い。また認知症の進行に伴って見える世界が変化していくことから、経過を軽度の時から重度に至るまで継続してみてもいかななくてはならない。時間の経過に従って変容していく彼らの生活世界の全容を解明するには、長い時間を必要とすることがわかった。それと並行して、個人情報保護やプライバシー保護の考えが強くなってきているために分析のための会話の録音などが難しくなっている。さらに、研究成果において解明されたことについて、認知症の家族や介護スタッフなど認知症介護の現場にいる人々にどのように周知してケア実践につなげ、評価していくべきか課題が残された。もうひとつは、日米比較を念頭においての介護システムや介護サービスの実態やその特徴と、彼らの生活世界の解明の間には、明らかにされなくてはならない多くの課題があり、時間が必要であることが問題点としてあげられた。

【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割】(近藤)

医療や福祉現場では、慢性的な人的・物質的リソース不足を抱えていることから、音楽療法の可能

性を理解する一方で、「こうありたい」という療法的な音楽の活用が、十分に臨床の便場へ応用できたとは言い難く、それぞれの場に応じたオーダーメイドの音楽療法の提供の形を考える必要がある。

<評価体制>

研究経過とその成果については、年度ごとに発表会を開催している。そこで研究科教員のみならず、学外の有識者をまじえてのディスカッションを行っており、活発な意見が出されるとともに、研究内容の意義が確認されている。また、発表会の内容については研究科委員会に提出され、そこで精査される。また、1年目、3年目、5年目と、3回にわたり、研究の進行に合わせた専門職を始め多くの市民へも公開するシンポジウムを開催している。研究者間の独善に陥ることなく広く市民の人々にとって、本研究の有益性についての他者評価の一環として、それらシンポジウムに対するアンケートを実施している。内容の意義や意味についての評価は高かった。

本研究プロジェクト全体としての評価体制は上述したとおりであるが、各研究グループは、独自にそれぞれの専門学会において発表し、学会員とのディスカッションを経ている。各グループの評価体制については、以下のとおりである。

【地域における住民参加型活動の開発と評価】(工藤・竹生・川添)

研究結果から示唆された地域特性や人口規模別の認知症啓発活動のあり方に関して、提言を含む報告書(*1～5)を北海道と札幌市に行い、認知症対策部門担当者と情報交換の場を持ち、認知症に関する今後の対策のあり方を協議した。行政の担当者から本研究結果に対する妥当性、適切性への合意が得られたことは研究への実践者からの肯定的な評価である。さらに、本研究結果から、今後の認知症対策の進め方に関して、広域である北海道のエリア毎の研修の必要性、認知症キャラバンメイトのスキルアップやフォロー研修など、具体的な活動方策への話し合いへと発展した。行政の担当部署だけでは認知症キャラバンメイト事業の評価は困難であったと考えられるが、本研究プロジェクトにより認知症啓発活動の効果と今後のあり方が共有され、資源配分の適切性を高めたと考えられる。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)

- (1) 報告書の作成時期ならびに年度初めの全体会議前に、事業目標に照らしてグループで研究事業について評価を実施し、その結果をもとに毎年度、研究費の資源配分を見直している。
- (2) 研究資金の使途明細は全体会議に提示し、他のグループメンバーからの意見を得ている他、執行に当たっては大学事務組織と相談・確認しながら行い、外部(第3者)評価を受ける体制ができている。
- (3) 本事業に係わる費用対効果は、調査や介入研究ならびに学会等での成果発表の際に研究費を支出したものの、本研究成果がメディアを通じて全国に報道された分はすべて無償であり、それが宣伝効果となって多くの講演依頼があり、研究成果の啓発活動につながった。パンフレット印刷費用や郵送料等は研究費や自費になることが多いが、講演参加者は認知症高齢者の食事支援に直接関わる人々であり、昨今は参加者から認知症高齢者の食事環境が改善したというフィードバックもあり、本事業においては十分な費用対効果があったものと評価している。

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】(阿保・薄井・花淵・小野・櫻井／池田)

- (1) これまでの研究資金の使途明細、研究資料、研究成果の概要を提示できるように準備を行うことで、第3者評価に備えている。
- (2) グループホームに暮らす人々の生活世界に関する研究成果については、医療人類学領域の第一人者であるハーバード大学のアーサー・クライマンとディスカッションを行い、評価された。
- (3) 本グループ研究におけるフィールドワークや会議、ディスカッションに必要な旅費等に関しては、本事業への助成金をあてているが、研究成果が新聞報道や単行本の出版、講演依頼に繋がったことにより広く啓蒙できたことを考えれば、十分な費用対効果があったと考える。

<研究期間終了後の展望>

【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動プロジェクト】(井出・森田・森)

3次予防活動としてははじめている認知症の人の活動支援は、NPOとして独立し今後も活動を展開し

ていく。引き続き、活動の効果や必要とされるサービスニーズなどの調査を続けていく予定である。1次予防としての運動の効果に関する研究では、今後も運動プログラムの提供を続けつつ、特に冬季における活動量の低下をいかに解消しつつ運動を継続するのかに焦点を当て、調査研究を継続する予定である。

【地域における住民参加型活動の開発と評価】(工藤・竹生・川添)

本研究グループのメンバーは、平成22年度からアクションリサーチとして近隣の3市町村において、地域住民向けの認知症の啓発に関する講座を実施しており、今後も継続の予定である。介入研究を続けると共に、地域住民への教育的な介入により、住民の認知症についての理解を深める効果的な方策を検討し、当講座を受講した住民がその後の地域での生活で、認知症の人々と家族を支援するシステムづくりのあり方を探求する研究へと発展している最中である。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)

本事業終了後も、現場の本課題に関するニーズは高いことから、継続的に研究を進めていく予定である。今後の研究の方針としては、本研究の成果物であるパンフレットを活用して介入研究を進めていくほか、パンフレットの改訂版に向けても取り組んでいく予定である。また、認知症の原因疾患別および重症度別の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価では、レビー小体型認知症と前頭側頭型認知症の対象数が少ないため、今後も事例を蓄積していく予定である。

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】(萩野・西・中川)

本事業終了後も、事例を蓄積して継続的に研究を進めていく予定である。また、本研究で得られた睡眠評価の方法を活かして、現在周術期における睡眠評価を行っており、認知症高齢者の術後せん妄の発症軽減に貢献するケア方法の探求にむけて研究を発足させている。

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】(阿保・薄井・花渕・小野・櫻井／池田)

- (1)会話分析プロファイルを実際に適用すべくデータを引き続き収集する努力をしている(薄井)。
- (2)アメリカの高齢者介護システムと認知症介護にかかわる現地調査を継続して行う計画であり、カリフォルニア州サンフランシスコ市／郡の「Self Help for the Elderly」(主に中国系のサンフランシスコ市民を対象に支援を行う非営利組織)ディレクターのKarla Gardner氏から研究に関する協力を得るなど、現地調査に向けた準備を進めている(櫻井)。
- (3)研究代表者である阿保は、北海道医療大学から長野県看護大学に移っているが、平成23年6月から、長野県看護大学看護実践国際研究センターにおいて、看護大学の研究分野と講座を横断する大型研究プロジェクトを立ち上げ、駒ヶ根市とも連携した研究(長寿社会における認知症高齢者のトータルケアの開発(仮称))を継続する予定である。また、共同研究者である大阪大学の池田も、当該研究プロジェクトの一員として参画予定である。研究内容は、これまでの認知症の人々の生活世界の解明に加え、予防や地域づくりまでを視野に入れたトータルケアの開発である。(阿保)

【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割】(近藤)

研究に参加した音楽療法士たちは、今回の研究成果を臨床実践に結びつけるためのスーパーヴィジョンを含めた継続的な勉強会の実施を計画している。

<研究成果の副次的効果>

【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動プロジェクト】(井出・森田・森)

認知症の人の活動支援は、札幌近郊での支援活動を進めていたが、他地域でも同じような活動を行いたいとの申し出を受け、帯広(北海道)、町田(東京)、柏(千葉)といった地域でも同じような活動支援の拠点が立ち上がったことは、研究成果の副次的効果と言える。

【地域における住民参加型活動の開発と評価】(工藤・竹生・川添)

行政の認知症対策の担当者が、本研究結果から得られた示唆を、認知症対策に活用している。例えば、認知症キャラバンメイトのエリア毎の研修や、認知症キャラバンメイトのスキルアップやフォロー研修の必要性など、研究結果を活用し対策が強化されつつある。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)

NHKで2回にわたり本研究が紹介されてから全国各地から講演依頼があり、参加者も介護職や看

護職、歯科医師、歯科衛生士、管理栄養士、調理師、薬剤師、医師、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士など様々な専門職や市民と多岐にわたり、本研究の成果に関して啓発活動を行う機会に恵まれた。また、講演の質疑応答の際には、現場の困難事例や成功事例について参加者から聴くことで、今後の研究に向けたヒントも得られた。さらに、講演のたびに参加者から本課題に関する書籍の希望が出され、出版社からも依頼があり、現在、書籍としてまとめている最中である。

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】(萩野・西・中川)

本研究で得られた睡眠評価の方法を活かして、現在周術期における睡眠評価を行っており、認知症高齢者の術後せん妄の発症軽減に貢献するケア方法の探求にむけて研究を発足させている。

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】(阿保・薄井・花渕・小野・櫻井／池田)

(1)認知症は固有のペースで進行していくことから、彼らの見える世界に合わせた生活支援が必要になってくる。そこで、家庭と病院、各種施設内で彼らの目線に応じて介護していくためのソフト機器の開発を目指して、平成23年9月に、スマート介護・福祉研究会の立ちあげに向けた産学(伊那テクノバレー・長野県看護大学・東京理科大学)によるキックオフミーティングが行われた。設立総会は10月に行われる予定である。キーワードはハード・イン・ソフトである。

(2)平成16年4月に出版された『痴呆老人が創造する世界』(岩波書店)は重度の認知症の人々についての調査をもとにまとめた本であるが、名称変更以前の書物であることから増刷が不可能であった。しかし、本研究による成果発表により多くの人々から増補版をという声があがり、岩波現代文庫「認知症の人々が創造する世界」として出版された。(*44)

11 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

(1) 認知症予防 (2) 住民参加 (3) 摂食・嚥下 (4) 咀嚼能力 (5) 睡眠・覚醒リズム
(6) 生活世界 (7) 介護保険 (8) 音楽療法

12 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

(以下の各項目が網羅されていれば、枠にはこだわらなくてもよい。)

上記、10(4)に記載された研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動プロジェクト】(井出・森田・森)
平成21年度

著者名	論文標題			
井出訓	認知症サポートの輪を広げる一認知症フレンドシップクラブ			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
月刊福祉	無	92	平成21年	74-77

平成22年度

著者名	論文標題			
木島輝美 井出訓	ショートステイを利用する認知症高齢者の生活を安定される要素			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本認知症ケア学会誌	有	10(1)	平成22年	

事業番号	07F001
------	--------

【地域における住民参加型活動の開発と評価】(工藤・竹生・川添)

平成 19 年度

著者名	論文標題			
工藤禎子	都市部に引越した要支援・要介護高齢者の生活変化と心身の状態			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
老年社会科学	有	29(4)	平成 20 年	553-560

平成 20 年度

著者名	論文標題			
竹生礼子	日本における 1990 年以降の在宅死と病院死に関連する要因の文献的検討			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本地域看護学会誌	有り	11(1)	平成 20 年	87-92

平成 22 年度

* 1

著者名	論文標題			
若山好美・工藤禎子・竹生礼子・佐藤美由紀	認知症キャラバンメイトの活動志向性とその関連要因			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本在宅ケア学会誌	有	13(2)	平成 22 年	34-41

* 2

著者名	論文標題			
竹生礼子・工藤禎子・若山好美	地域における認知症の啓発活動をになうボランティアの活動内容と活動意向			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本在宅ケア学会誌	有	13(2)	平成 22 年	67-76

平成 23 年度

* 3

著者名	論文標題			
竹生礼子・工藤禎子・若山好美・桑原ゆみ・明野聖子・佐藤美由紀・川添恵理子	認知症についての啓発と地域づくりをめざす認知症キャラバンメイトの登録者の活動と意識、－北海道における市町村の人口模別の分析－			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本地域看護学会誌	有	13(2)	平成 23 年	23-30

著者名	論文標題			
川添恵理子	わが国における 1999～2009 年の退院計画に関する文献の概観			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本在宅ケア学会誌	有り	14(2)	平成 23 年	18-25

事業番号	07F001
------	--------

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)
平成19年度

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の人の日常生活における困難とケアのポイントー食事ケア			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
看護技術	無	98(6)	平成 19 年	39-45

著者名	論文標題			
Shimoyama, K, Chiba Y, Suzuki Y	The effect of awareness on the outcome of oral health performed by home care service providers.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Gerodontology	有	24	平成 19 年	204-210

著者名	論文標題			
千葉由美	摂食・嚥下障害を有する患者のケースマネジメント			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
看護技術	有	53(14)	平成 19 年	1293-1296

著者名	論文標題			
千葉由美	摂食・嚥下障害に関する教育・実践・研究への取り組みと課題			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本摂食・嚥下リハビリテーション学会誌	有	11(2)	平成 19 年	158

著者名	論文標題			
Kang Y, Denpo Y, Ohashi A, Saito M, Tyoda H, Sato H, Koshino H, Maeda Y, Hirai T.	Nitric oxide activates leak K(+) currents in the presumed cholinergic neuron of basal forebrain.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
J Neurophysiol	有	98(6)	平成 19 年	3397-3410

著者名	論文標題			
内ヶ島伸也, 山田律子	認知症の人の日常生活における困難とケアのポイントー清潔のケア			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
看護技術	無	53(12)	平成 19 年	39-45

平成20年度

著者名	論文標題			
山田 律子他	高齢者訪問看護の質指標開発の検討ー全国の訪問看護ステーションで働く看護師による自己評価			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本看護科学学会誌	有	28 巻	平成 20 年	37-45

* 11

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の人にみる摂食・嚥下障害の特徴と食事ケアー認知症の病型別特性を踏まえて			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
認知症ケア事例ジャーナル	無	1 巻	平成 20 年	428-436

事業番号	07F001
------	--------

著者名	論文標題			
内ヶ島伸也	認知症高齢者の日常生活ケアに関わる「選択の表明」能力と「論理的思考」能力の特徴			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
北海道医療大学看護福祉学部学会誌	有	5(1)	平成 21 年	39-47

著者名	論文標題			
千葉由美, 市村久美子	認定看護師と看護師の摂食・嚥下障害看護に対する認識の相違			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本摂食・嚥下リハビリテーション学会誌	有	12(3)	平成 20 年	178-186

著者名	論文標題			
森田久美子, 佐々木明子, 寺岡加代, 千葉由美, 山崎恭子, 大塚陽一, 中山京英, 大島厚子, 齊藤典子	デイサービスに通う高齢者への口腔、摂食・嚥下ケアの介入効果			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
公衆衛生	有	72(9)	平成 20 年	753-759

著者名	論文標題			
若杉葉子, 戸原玄, 中根綾子, 後藤志乃, 大内ゆかり, 三串伸哉, 竹内周平, 高島真穂, 都島千明, 千葉由美, 植松宏	不顕性誤嚥のスクリーニング検査における咳テストの有用性に関する検討, 日本摂食嚥下咳テスト			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本摂食・嚥下リハビリテーション学会誌	有	12(2)	平成 20 年	109-117

著者名	論文標題			
千葉由美	なぜナースの摂食・嚥下障害への取り組みが必要なのか			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Nursing Today	無	23(5)	平成 20 年	11

著者名	論文標題			
千葉由美	病棟ナースが知っておくべきアセスメントの基本			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Nursing Today	無	23(5)	平成 20 年	17-29

著者名	論文標題			
千葉由美	-安全な摂食援助-アセスメントの基づくチェックポイント②			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Nursing Today	無	23(5)	平成 20 年	32-33

* 19

著者名	論文標題			
岩崎一生, 越野 寿, 平井敏博	ラットにおける粉末飼料飼育の情動活動に及ぼす影響－飼育飼料変更前後の自発運動量の測定－			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本咀嚼学会雑誌	有	18 巻	平成 20 年	29-36

事業番号	07F001
------	--------

著者名	論文標題			
Toyoda H, Saito M, Sato H, Dempo Y, Ohashi A, <u>Hirai T</u> , Maeda Y, Kaneko T, Kang Y.	cGMP activates a pH-sensitive leak K ⁺ current in the presumed cholinergic neuron of basal forebrain.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
J Neurophysiol	有	99 巻	平成 20 年	2126-2133

平成 21 年度

著者名	論文標題			
<u>Chiba, Y</u> , Shimoyama, K, Suzuki Y.	Recognition and behavior related to oral care caregiver managers in the community			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Gerodontology	有	26(2)	平成 21 年	112-121

著者名	論文標題			
<u>Chiba, Y</u> , Shimoyama, K, Suzuki Y.	Recognition and behavior related to oral care caregiver managers in the community			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Gerodontology	有	26(2)	平成 21 年	112-121

著者名	論文標題			
<u>Chiba Y</u> , Sasaki A, Morita K, Otsuka Y, Nakayama T, et al.	Effectiveness of care intervention related to ingestion and deglutition for the elderly using day services in the community.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
International Medical Journal	有	16(4)	平成 21 年	293-303

著者名	論文標題			
Tohara H, Nakane A, Murata S, Mikushi S, Ohuchi Y, Wakasugi Y, Takashima M, <u>Chiba Y</u> , Uematsu H.	Inter- and intra-rater reliability in fibroptic endoscopic evaluation of swallowing			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Oral Rehabilitation	有	37(12)	平成 21 年	884-891

著者名	論文標題			
<u>Chiba Y</u> , Shimoyama K, Suzuki Y.	Recognition and behavior related to oral care caregiver managers in the community			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Gerodontology	有	26	平成 21 年	112-121

著者名	論文標題			
<u>Chiba Y</u> , Sasaki A, Morita K, et al.	Effectiveness of care intervention related to ingestion and deglutition for the elderly using day in the community.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
International Medical Journal	有	in press	平成 21 年	in press

著者名	論文標題			
<u>山田律子</u> , 山本則子, 石垣和子	訪問看護における高齢者の栄養管理質指標の開発と実用性の検討			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
北海道医療大学看護福祉学部紀要	無	16	平成 21 年	51-59

事業番号	07F001
------	--------

著者名	論文標題			
山田律子	摂食・嚥下障害をもつ認知症の人に対する看護の実際 *			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
老年精神医学雑誌	無	20(12)	平成 21 年	428-436

著者名	論文標題			
山田律子	認知症高齢者における口腔ケア			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Advances in Aging and Health Research 2009 財団法人長寿科学振興財団	無		平成 21 年	125-132

著者名	論文標題			
平井敏博, 越野寿, 池田和博, 川西克弥	噛むことと健康・長寿・高齢者の咀嚼を考える-			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
北海道歯科医師会誌		65 号	平成 22 年	15-29

平成 22 年度

著者名	論文標題			
Kawanishi K, <u>Koshino H</u> , Toyoshita Y, Tanaka M, <u>Hirai T</u>	Effect of Mastication after Middle Cerebral Artery Occlusion in Rats			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases	有	19(5)	平成 22 年	398-403

著者名	論文標題			
山縣千尋、千葉由美、山本則子	認知症高齢者とその家族が望む入院生活			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
千葉県立保健医療大学紀要	有	1(1)	平成 22 年	19-25

著者名	論文標題			
千葉由美	食物の取り込み、飲み込み(摂食、嚥下)のお話			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
千葉県立保健医療大学紀要	無	1(1)	平成 22 年	81-82

著者名	論文標題			
山田律子	認知症をもつ人の食事ケアとは？			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう 21,	無	21(6)	平成 22 年	60-63

著者名	論文標題			
山田律子	加齢変化と摂食・嚥下のメカニズム			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう 21	無	21(7)	平成 22 年	54-57

事業番号	07F001
------	--------

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の基礎知識と食事ケアに必要な3つの視点			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう 21	無	21(8)	平成 22 年	54-57

著者名	論文標題			
山田律子	食べ始めることができない人の食事ケア			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう 21	無	21(9)	平成 22 年	54-57

著者名	論文標題			
山田律子	食べ続けることができない人の食事ケア			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう 21	無	21(10)	平成 22 年	54-57

著者名	論文標題			
山田律子	食べ方が乱れる人の食事ケア *			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう 21	無	21(11)	平成 22 年	50-53

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の原因疾患をふまえた食事ケア①ーアルツハイマー病の人の場合			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう 21	無	21(13)	平成 22 年	50-53

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の原因疾患をふまえた食事②ー前頭側頭型認知症とレビー小体型認知症の人の場合			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう 21	無	21(14)	平成 22 年	50-53

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の原因疾患をふまえた食事ケア③ー血管性認知症の人の場合 *			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう 21	無	22(1)	平成 22 年	52-55

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の人の摂食力を高める「食事環境づくり」①ー見当織・記憶を助け、機能的能力を高める環境			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう 21	無	22(2)	平成 22 年	52-55

事業番号	07F001
------	--------

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の人の摂食力を高める「食事環境づくり」②－食事に専心でき、社会的交流を高める環境			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう21	無	22(3)	平成22年	52-55

著者名	論文標題			
内ヶ島伸也, 蒲原龍	認知症高齢者の日常生活ケアにかかわる意思決定能力の特徴と関連要因の検討			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
北海道医療大学看護福祉学部学会誌	有	7(1)	平成22年	13-23

平成23年度

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の人が再び口から食べるために－経管栄養から経口摂食に向けて－			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
おはよう21	無	22(4)	平成23年	50-53

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の人の経管栄養の注意点			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
認知症ケア最前線	無	28	平成23年	34-39

著者名	論文標題			
豊下祥史、会田康史、額 諭史、川西克弥、會田英紀、池田和博、守屋信吾、越野寿	特定高齢者候補者の咀嚼機能と基本チェックリストの各因子との相関			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本補綴歯科学会誌	有	in press		in press

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】(萩野・西・中川)

平成19年度

著者名	論文標題			
萩野悦子	認知症の人の日常生活における困難とケアのポイント－睡眠のケア			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
看護技術	無	53(12)	平成19年	57-62

著者名	論文標題			
萩野悦子	認知症の人のBPSD(行動・心理症状)への看護アプローチ ⑥睡眠・覚醒障害			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
看護技術	無	53(12)	平成19年	93-97

事業番号	07F001
------	--------

平成 20 年度

著者名	論文標題			
中川賀嗣	失行とは何か(失行の現況). 失行.高次脳機能障害各論.高次脳機能障害のすべて			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
神経内科	無	68[suppl. 5]	平成 20 年	279-288

著者名	論文標題			
中川賀嗣	概念失行、使用失行、パントマイム失行などー新たな可能性ー. 失行.高次脳機能障害各論.高次脳機能障害のすべて			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
神経内科	無	68[suppl. 5]	平成 20 年	301-308

著者名	論文標題			
中川賀嗣	運動無視. 無視症候群・視空間性障害.高次脳機能障害各論.高次脳機能障害のすべて			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
神経内科	無	68[suppl. 5]	平成 20 年	432-438

著者名	論文標題			
中川賀嗣	失行について-使用失行の見かた、捉え方-			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
認知神経科学	無	10	平成 20 年	77-87

著者名	論文標題			
中川賀嗣	失行の新しい分類と ADL 障害			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
MB Monthly Rehabilitation	無	99	平成 20 年	23-35

著者名	論文標題			
萩野悦子	認知症高齢者の自発性を引き出す集団音楽療法における介入スキル			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
北海道医療大学看護福祉学部学会誌	有	4(1)	平成 20 年	17-27

平成 21 年度

著者名	論文標題			
萩野悦子	認知症の長期経過のケア			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
老年精神医学雑誌	無	20	平成 21 年	646-650

平成 22 年度

著者名	論文標題			
中川賀嗣	認知症性疾患の失語・失行・失認症状			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
老年期痴呆研究会誌	無	15	平成 20 年	92-96

事業番号	07F001
------	--------

著者名	論文標題			
中川賀嗣	認知症性疾患にみられる行為・動作の障害			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
老年期痴呆研究会誌	無	15	平成 20 年	30-34

著者名	論文標題			
中川賀嗣	認知症性疾患にみられる行為・動作の障害			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
老年期痴呆研究会誌	無	15	平成 20 年	30-34

平成 23 年度

著者名	論文標題			
中川賀嗣	失行.精神科臨床評価検査法マニュアル			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
臨床精神医学	無	39[suppl]	平成 20 年	508-515

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】
(阿保・薄井・花淵・小野・櫻井／池田)

平成 19 年度

著者名	論文標題			
池田光穂	伝わる言葉／伝わらない言葉:臨床コミュニケーション教育の経験から得たもの(1)			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
電子情報通信学会	有		平成 19 年	19-23

平成 20 年度

著者名	論文標題			
八木こずえ、鈴木麻記子、坂井美加子、北村育子、阿保順子	青年期統合失調症患者の生きにくさと看護援助の方法			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本精神保健看護学会誌	有	17(1)	平成 20 年	12-23

平成 21 年度

著者名	論文標題			
池田光穂・西村ユミ	臨床コミュニケーション教育における発話と実践の対話的関連性について			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
電子情報通信学会	有		平成 21 年	23-28

著者名	論文標題			
池田光穂・西村ユミ	サイエンスショップにおける臨床研究の可能性:市民の声から協働のあり方を探る			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
電子情報通信学会	有		平成 21 年	43-48

事業番号	07F001
------	--------

著者名	論文標題			
Mitsuho Ikeda & Michael K. Roemer	Distorted Medicalization” of Senile Dementia: The Japanese case.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
World Cultural Psychiatry Research Review	有	4(1)	2009年	22-27

著者名	論文標題			
池田光穂	医療の不確実性時代におけるコミュニケーション: EBM の人間観批判			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
大阪保険医雑誌	無	510	平成 21 年	24-26

著者名	論文標題			
池田光穂	「文化の翻訳」に資格はいらない: 制度的通訳と文化人類学			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
こころと文化	有	8(2)	平成 21 年	139-145

著者名	論文標題			
阿保順子	看護における“言葉にならない技術”論			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
インターナショナルナーシングレビュー	無	32(4)	平成 21 年	33-36

平成 22 年度

* 36

著者名	論文標題			
薄井 明	発話番交替システムにおける「語り」の組織化と展開			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
北海道医療大学看護福祉学部紀要	無	17	平成 22 年	61-70

* 37

著者名	論文標題			
櫻井 潤・渋谷 博史・中浜 隆	21 世紀のアメリカ社会保障			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
海外社会保障研究	無(招待論文)	171	平成 22 年	4-15

著者名	論文標題			
櫻井 潤	グローバル化と大阪府阪南市の地域経済			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
北海道医療大学看護福祉学部紀要	無	17	平成 22 年	10-19

事業番号	07F001
------	--------

著者名	論文標題			
櫻井 潤	大阪府阪南市の地域経済と地域再生：公民協働のまちづくりと地域経済の活性化の条件			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
北海道医療大学看護福祉学部紀要	無	17	平成 22 年	21-30

著者名	論文標題			
池田光穂	実践を生み出す論理の可能性：対話論ノート			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Communication-Design	有	3	平成 22 年	139-145

著者名	論文標題			
池田光穂、伊藤京子、西村ユミ	ディスコミュニケーションとコミュニケーション支援：その理論的素描			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
電子情報通信学会	有		平成 22 年	23-28

著者名	論文標題			
池田光穂、西村ユミ	臨床コミュニケーション教育：PBL から対話論理へ、対話論理から実践へ			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本ヘルスコミュニケーション研究会雑誌	有	1(1)	平成 22 年	48-52.

平成 23 年度

* 38

著者名	論文標題			
宮地普子・阿保順子・渡邊智香・岡野照美	変容した生活世界へ対峙する認知症高齢者の防衛の形			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本赤十字看護学会誌	有	11(2)	平成 23 年	11-19

* 39

著者名	論文標題			
阿保順子	認知症の人から見える世界			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本保健福祉学会誌	無	17(2)	平成 23 年	1-9

<図書>

【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動プロジェクト】（井出・森田・森）
平成 20 年度

著者名	出版社		
山田律子、井出訓(編著)	医学書院		
書名	発行年	総ページ数	
生活機能からみた老年看護過程(担当：食事、摂食・嚥下障害)	平成 20 年	476	

事業番号	07F001
------	--------

著者名	出版社		
山田律子・井出訓(編) 萩野悦子	医学書院		
書名	発行年	総ページ数	
生活機能からみた老年看護過程+病態・生活機能関連図 第2部睡眠障害	平成20年	476ページ中 11ページ	

平成23年度

著者名	出版者		
井出訓, 内ヶ島伸也, 他	中央法規出版		
書名	発行年	総ページ数	
認知症の人のサポートブック	平成23年	148	

【地域における住民参加型活動の開発と評価】(工藤・竹生・川添)**平成19年度**

著者名	出版社		
工藤禎子	医歯薬出版株式会社		
書名	発行年	総ページ数	
「地域看護アセスメントガイド」(佐伯和子編著)地域看護アセスメントと評価 の実際(高齢者保健活動の実践例)	平成19年	84-93	

著者名	出版社		
工藤禎子	中央法規		
書名	発行年	総ページ数	
「改訂高齢者看護学」(小玉敏江・亀井智子編)高齢者看護の場との特性と 社会資源	平成19年	400ページ	

平成22年度

著者名	出版社		
工藤禎子	医学書院		
書名	発行年	総ページ数	
「老年看護学」(北川公子編)介護予防と地域づくり, 介護家族への看護	平成22年	376ページ	

平成23年度

著者名	出版者		
工藤禎子	真興交易医書出版部		
書名	発行年	総ページ数	
「最新保健学」(野尻雅美編)家族における健康管理	平成23年	255ページ	

事業番号	07F001
------	--------

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)
平成19年度

著者名	出版社		
山田律子	医歯薬出版		
書名	発行年	総ページ数	
訪問看護における摂食・嚥下リハビリテーション: 退院から在宅まで(担当: 認知症をもつ人の摂食・嚥下に関するアセスメント)	平成19年	25-30, 82-89	

著者名	出版社		
山田律子	医歯薬出版		
書名	発行年	総ページ数	
認知症高齢者の看護(担当: IV-2. 認知症高齢者の生活環境づくり)	平成19年	79-99	

平成20年度

著者名	出版社		
山田律子	日本看護協会出版会		
書名	発行年	総ページ数	
高齢者訪問看護の質指標—ベストプラクティスを目指して	平成20年	186	

著者名	出版社		
山田律子, 井出訓(編著)	医学書院		
書名	発行年	総ページ数	
生活機能からみた老年看護過程(担当: 食事, 摂食・嚥下障害)	平成20年	476	

平成21年度

著者名	出版社		
細井紀雄、平井敏博、大川周二、市川哲雄(編・著)	医歯薬出版		
書名	発行年	総ページ数	
無歯学補綴治療学(第2版)	平成21年	330	

著者名	出版社		
山田律子	医学書院		
書名	発行年	総ページ数	
系統看護学講座 老年看護学第7版(担当)「第4章高齢者のアセスメント A. 身体の高齢変化とアセスメント」「第6章 認知症」	平成22年	45	

著者名	出版社		
山田律子	照林社		
書名	発行年	総ページ数	
あったか介護・看護のための用語集(担当: 摂食・嚥下や認知症に関する用語)	平成22年		

事業番号	07F001
------	--------

著者名	出版者		
山脇正永,野村徹編,千葉由美他著	医歯薬出版株式会社		
書名	発行年	総ページ数	
HAZOP 誤嚥・嚥下障害のリスクマネジメント	平成 21 年	192	

著者名	出版者		
清野裕,門脇孝,中村丁次,本田佳子編, 千葉由美他著	医学書院		
書名	発行年	総ページ数	
NST 臨床栄養療法スタッフマニュアル	平成 21 年	664	

著者名	出版社		
平井敏博	岩波書店		
書名	発行年	総ページ数	
科学 担当 咀嚼は高次脳機能を賦活するか？	平成 22 年	110	

平成 22 年度

著者名	出版者		
酒井郁子,金城利雄編,千葉由美他著	南江堂		
書名	発行年	総ページ数	
リハビリテーション看護	平成 22 年	374	

著者名	出版者		
Yamawaki M , Nomura T Ed. Chiba Y et al. Au	University Education Press		
書名	発行年	総ページ数	
Risk management for dysphagia-Application of Hazard and operability study(HAZOP)-	平成 22 年	121	

著者名	出版者		
山田律子	日本看護協会出版会		
書名	発行年	総ページ数	
高齢者の生活機能再獲得のためのケアプロトコールー連携と協働のために(担当 第 4 章 口から食べることを目指すケア:経管栄養から経口へ	平成 22 年	176	

著者名	出版者		
平井敏博, (田中健蔵, 北村憲司, 本田武司 監修)	祥文社印刷株式会社		
書名	発行年	総ページ数	
「口腔の病気と全身の健康」(第1版)担当 8. 歯の喪失と認知症	平成 23 年	162 うち 44-50	

著者名	出版者		
平井敏博(編)	医歯薬出版		
書名	発行年	総ページ数	
コンプリートデンチャーテクニク第6版	平成 23 年	202	

事業番号	07F001
------	--------

平成 23 年度

著者名	出版者		
井出訓, 内ヶ島伸也, 他	中央法規出版		
書名	発行年	総ページ数	
認知症の人のサポートブック	平成 23 年	148	

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】(萩野・西・中川)**平成 20 年度**

著者名	出版社		
山田律子・井出訓(編) 萩野悦子	医学書院		
書名	発行年	総ページ数	
生活機能からみた老年看護過程+病態・生活機能関連図 第1編 活動	平成 20 年	476 ページ中 7 ページ	

著者名	出版社		
山田律子・井出訓(編) 萩野悦子	医学書院		
書名	発行年	総ページ数	
生活機能からみた老年看護過程+病態・生活機能関連図 第2編 睡眠障害	平成 20 年	476 ページ中 11 ページ	

著者名	出版社		
萩野悦子	ワールドプランニング		
書名	発行年	総ページ数	
認知症ケアのためのケアマネジメント	平成 20 年	245 ページ中 20 ページ	

平成 21 年度

著者名	出版社		
北川公子(編), 萩野悦子	医学書院		
書名	発行年	総ページ数	
系統看護学講座専門分野Ⅱ 老年看護学 第5章「生活リズムと看護ケア」	平成 21 年	387 ページ中 12 ページ	

**【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】
(阿保・薄井・花淵・小野・櫻井／池田)****平成 19 年度**

著者名	出版社		
池田光穂・奥野克巳編	学陽書房		
書名	発行年	総ページ数	
医療人類学のレッスン: 病いをめぐる文化を探る	平成 19 年	268	

著者名	出版社		
阿保順子監訳	医学書院		
書名	発行年	総ページ数	
看護診断に基づく精神看護ケアプラン	平成 19 年	532	

事業番号	07F001
------	--------

著者名	出版社		
阿保順子監訳	誠信書房		
書名	発行年	総ページ数	
アルツハイマーのための新しいケアー語られなかった言葉を探して	平成 19 年	296	

著者名	出版社		
花淵馨也	学陽書房		
書名	発行年	総ページ数	
医療人類学のレッスン:病をめぐる文化を探る	平成 19 年	76-98	

平成 20 年度

著者名	出版社		
伏木信次・樫則章・霜田求編(池田光穂)	金芳堂		
書名	発行年	総ページ数	
生命倫理と医療倫理(改訂2版)第 21 章「医療人類学」	平成 20 年	245	

著者名	出版社		
阿保順子	批評社		
書名	発行年	総ページ数	
精神看護という営み	平成 20 年	206	

平成 21 年度

* 40

著者名	出版社		
渋谷博史・櫻井潤・塚谷文武	学文社		
書名	発行年	総ページ数	
福祉国家と地域と高齢化	平成 21 年	180	

著者名	出版社		
松本雅彦・阿保順子・岡崎伸郎	批評社		
書名	発行年	総ページ数	
自分探しの病理	平成 21 年	150	

平成 22 年度

* 41

著者名	出版社		
渋谷博史・樋口均・櫻井潤(編著)	学文社		
書名	発行年	総ページ数	
グローバル化と福祉国家と地域	平成 22 年	179	

事業番号	07F001
------	--------

著者名	出版社		
池田光穂	文化書房博文社		
書名	発行年	総ページ数	
看護人類学入門	平成 22 年	265	

* 42

著者名	出版社		
浅野 弘毅・阿保順子	批評社		
書名	発行年	総ページ数	
高齢者の妄想－老いの孤独の一側面	平成 22 年	136	

* 43

著者名	出版社		
阿保順子・池田光穂・西川勝・西村ユミ	雲母書房		
書名	発行年	総ページ数	
認知症ケアの創造－その人らしさの看護へ	平成 22 年	205	

平成 23 年度

著者名	出版社		
渋谷博史・片山泰輔(編)／渋谷博史・片山泰輔・櫻井潤・埴武郎・久本貴志(著)	昭和堂		
書名	発行年	総ページ数	
アメリカの芸術文化政策と公共性:民間主導と分権システム	平成 23 年	265	

* 44

著者名	出版社		
阿保順子	岩波書店		
書名	発行年	総ページ数	
「認知症の人々が創造する世界」(岩波現代文庫)	平成 23 年	231	

<学会発表>

【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動プロジェクト】(井出・森田・森)

平成 19 年度

発表者名	発表標題		
内ヶ島伸也, 井出訓, 山田律子	認知症高齢者の日常生活ケアに関わる意思決定能力の特徴		
学会名	開催地	発表年月	
第 8 回日本認知症ケア学会大会	盛岡	平成 19 年 10 月	

事業番号	07F001
------	--------

平成 21 年度

発表者名	発表標題		
Satoshi Ide, Shinya Uchigashima	Dementia Friendship Club: A trial for developing a community system for people in dementia in Japan.		
学会名	開催地	発表年月	
IAGG World congress of gerontology and geriatrics	France	平成 21 年 7 月	

平成 22 年度

発表者名	発表標題		
井出訓	認知症ケアのためのまちづくり「認知症フレンドシップクラブがめざすまち」		
学会名	開催地	発表年月	
第 11 回日本認知症ケア学会 シンポジウムⅣ	神戸	平成 22 年 10 月	

発表者名	発表標題		
Satoshi Ide	Building community support system for people with dementia: Dementia Friendship Club		
学会名	開催地	発表年月	
Dementia Care Conference in Korea 招待講演	Seoul	平成 22 年 11 月	

【地域における住民参加型活動の開発と評価】(工藤・竹生・川添)**平成 19 年度**

発表者名	発表標題		
工藤禎子	引越した高齢者が感じている身体の変化と引越後の生活に対する思い		
学会名	開催地	発表年月	
第 49 回日本老年社会科学学会老年社会科学,29(2),報告要旨号,p276,	札幌	平成 19 年 7 月	

発表者名	発表標題		
竹生礼子, 川村三希子, 小島悦子, 福田ひとみ, 柳谷幸枝	訪問看護師に対する効果的ながん疼痛マネジメントの教育プログラムの検討;実践に役立てられるよう検討した講義の評価		
学会名	開催地	発表年月	
第 12 回日本緩和医療学会総会	岡山	平成 19 年 6 月	

発表者名	発表標題		
竹生礼子	入院中の高齢がん患者が自宅で療養するために必要だと考えていること		
学会名	開催地	発表年月	
第 17 回日本看護研究学会北海道地方会学術集会	札幌	平成 19 年 6 月	

平成 20 年度

発表者名	発表標題		
若山好美, 工藤禎子, 竹生礼子, 佐藤美由紀	認知症ボランティアの活動志向性とその関連要因, 認知症キャラバンメイト養成研修を受講したボランティアの調査から		
学会名	開催地	発表年月	
日本在宅ケア学会	大阪	平成 21 年 3 月	

事業番号	07F001
------	--------

平成 21 年度

* 4

発表者名	発表標題		
竹生礼子、工藤禎子、若山好美、佐藤美由紀、明野聖子、桑原ゆみ	認知症高齢者が暮らしやすい地域づくりをめざすボランティアの市町村規模別にみた活動状況と意向		
学会名	開催地	発表年月	
日本地域看護学会 第 12 回学術集会	千葉	平成 21 年 8 月	

* 5

発表者名	発表標題		
竹生礼子、工藤禎子、若山好美、佐藤美由紀、明野聖子、桑原ゆみ	認知症高齢者が暮らしやすい地域づくりをめざすボランティアの活動に関連する要因、認知症キャラバンメイトの活動状況からの検討		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会 第 14 回学術集会	札幌	平成 21 年 9 月	

平成 22 年度

* 6

発表者名	発表標題		
工藤禎子・竹生礼子・若山好美・佐藤美由紀・明野聖子・桑原ゆみ・川添恵理子	認知症キャラバンメイト登録者が活動について感じていること 第 1 報 活動組織なし・未活動非専門職の視点		
学会名	開催地	発表年月	
日本地域看護学会 第 13 回学術集会	札幌	平成 22 年 7 月	

* 7

発表者名	発表標題		
竹生礼子・工藤禎子・若山好美・佐藤美由紀・明野聖子・桑原ゆみ・川添恵理子	認知症キャラバンメイト登録者が活動について感じていること 第 2 報 活動組織なし・未活動専門職の視点		
学会名	開催地	発表年月	
日本地域看護学会 第 13 回学術集会	札幌	平成 22 年 7 月	

* 8

発表者名	発表標題		
工藤禎子・竹生礼子・川添恵理子・明野聖子	認知症キャラバンメイト未活動専門職の認識、－活動組織がある地域のキャラバンメイトが感じていること(第 3 報)－		
学会名	開催地	発表年月	
日本看護科学学会 第 30 回学術集会	札幌	平成 22 年 12 月	

平成 23 年度

* 9

発表者名	発表標題		
竹生礼子・工藤禎子・若山好美・佐藤美由紀・明野聖子・桑原ゆみ	非専門職の認知症キャラバンメイトが活動の推進のために必要だと考えていること、－認知症キャラバンメイト調査の自由記載の分析(第 4 報)－		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会 第 16 回学術集会	東京	平成 23 年 6 月	

事業番号	07F001
------	--------

* 10

発表者名	発表タイトル		
Yoshiko Kudo, Reiko Takeu, Eriko Kawazoe, Yoshimi Wakayama, Yumi Kuwabara, Seiko Akeno, Miyuki Sato, Satomi Kondo	Community Development For People With Dementia Through Caravan-Mate-Volunteer Project		
学会名	開催地	発表年月	
The 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing	Kobe	平成 23 年 7 月	

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)
平成 19 年度

発表者名	発表タイトル		
内ヶ島伸也, 井出訓, 山田律子	認知症高齢者の日常生活ケアに関わる意思決定能力の特徴		
学会名	開催地	発表年月	
第 8 回日本認知症ケア学会大会(石崎賞:学会賞受賞)	盛岡	平成 19 年 10 月	

発表者名	発表タイトル		
千葉由美	摂食・嚥下障害を有する利用者の栄養摂取法に関する検討～病院・長期療養施設・在宅の比較～		
学会名	開催地	発表年月	
第 27 回日本看護科学学会学術集会	東京	平成 19 年 12 月	

発表者名	発表タイトル		
森田久美子, 佐々木明子, 鈴木恭子, 千葉由美	デイサービスを利用している高齢者への口腔、摂食・嚥下ケア実施の効果-1 年間の介入前後での比較		
学会名	開催地	発表年月	
第 10 回日本地域看護学会	神奈川	平成 19 年 7 月	

発表者名	発表タイトル		
鈴木恭子, 佐々木明子, 森田久美子, 千葉由美	高齢者の介護度と摂食・嚥下機能及び口腔感想と QOL との関連		
学会名	開催地	発表年月	
第 10 回日本地域看護学会	神奈川	平成 19 年 7 月	

発表者名	発表タイトル		
千葉由美, 田高悦子, 佐々木明子	全国の在宅療養者における摂食・嚥下障害 有症率ならびにその特性に関する調査		
学会名	開催地	発表年月	
第 10 回日本地域看護学会	神奈川	平成 19 年 7 月	

発表者名	発表タイトル		
森田久美子, 佐々木明子, 千葉由美, 寺岡加代, 大塚陽一, 中山京英, 鈴木恭子	デイサービスを利用している高齢者への口腔、摂食・嚥下ケア実施の効果-半年間の介入前後での比較-		
学会名	開催地	発表年月	
第 11 回日本在宅ケア学会学術集会	埼玉	平成 19 年 3 月	

事業番号	07F001
------	--------

発表者名	発表標題		
Chiba Y, Uematsu H, Yamawaki M, Tohara H	Study related to tube-feeding of dysphagic institutionalized elderly in Japan.		
学会名	開催地	発表年月	
The 16 th Dysphagia Research Society Meeting	South Carolina US	平成 20 年 3 月	

発表者名	発表標題		
田中真樹、越野 寿、岩崎一生、横山雄一、平井敏博.	ラット飼育飼料形態の血液指標への影響		
学会名	開催地	発表年月	
第 116 回日本補綴歯科学会	神戸	平成 19 年 5 月	

発表者名	発表標題		
川西克弥、越野 寿、鈴木裕仁、豊下祥史、岩崎一生、田中真樹、横山雄一、平井敏博	咀嚼機能に関する研究のための脳梗塞モデルラットの作製		
学会名	開催地	発表年月	
第 26 回北海道医療大学歯学会	札幌	平成 19 年 3 月	

* 14

発表者名	発表標題		
松原国男、越野 寿、木下憲治、服部佳子、平井敏博	内視鏡画像と嚥下音を利用する嚥下機能評価法に関する検討		
学会名	開催地	発表年月	
第 18 回日本老年歯科医学会	札幌	平成 19 年 6 月	

* 17

発表者名	発表標題		
越野 寿、横山雄一、平井敏博、細井紀雄	全部床義歯装着者の下顎顎堤形態と咀嚼機能 一新・旧義歯の比較から一		
学会名	開催地	発表年月	
第 18 回日本咀嚼学会	大阪	平成 19 年 8 月	

* 15

発表者名	発表標題		
Toyoshita Y, Matsubara K, Koshino H, Hirai T, Furukawa Y.	Evaluation Method of Swallowing Function by Swallowing Sound and Endoscope		
学会名	開催地	発表年月	
11th Meeting of the International College of Prosthodontists	Fukuoka	平成 19 年 9 月	

* 16

発表者名	発表標題		
Matsubara K, Koshino H, Toyoshita Y, Yokoyama Y, Tanaka T, Sudo E, Iwasaki K, Hirai T, Furukawa Y.	Evaluation Method of Swallowing Function in Disabled Patients with Dysphagia by Swallowing Sound and Endoscope.		
学会名	開催地	発表年月	
The Japan Prosthodontic Society and The Greater New York Academy of Prosthodontics hold the 2nd joint meeting	Tokyo	平成 19 年 10 月	

事業番号	07F001
------	--------

* 18

発表者名	発表標題	学会名	開催地	発表年月
豊下祥史、越野 寿、横山雄一、平井敏博、細井紀雄、渡辺信行	無歯顎患者の下顎義歯支持基盤形態が咀嚼能力に及ぼす影響	平成 19 年度 日本補綴歯科学会 東北・北海道支部学術大会	小樽	平成 19 年 11 月

発表者名	発表標題	学会名	開催地	発表年月
鈴木裕仁、田中真樹、川西克弥、豊下祥史、越野 寿、平井敏博	ラットにおける咀嚼機能が抗酸化に及ぼす影響	第 26 回北海道医療大学歯学会	札幌	平成 20 年 2 月

発表者名	発表標題	学会名	開催地	発表年月
川西克弥、越野 寿、鈴木裕仁、豊下祥史、岩崎一生、田中真樹、横山雄一、平井敏博	咀嚼機能に関する研究のための脳梗塞モデルラットの作製	第 26 回北海道医療大学歯学会	札幌	平成 19 年 3 月

平成 20 年度

発表者名	発表標題	学会名	開催地	発表年月
山田律子、萩野悦子、内ヶ島伸也、井出訓	経管栄養を受けている認知症高齢者が口から食べる力を見極めるためのガイドラインの作成	第 18 回日本看護研究学会北海道地方会学術集会 (研究奨励賞受賞)	札幌	平成 20 年 6 月

発表者名	発表標題	学会名	開催地	発表年月
山田律子	教育講演: 摂食・嚥下	第9回日本認知症ケア学会大会	高松	平成 20 年 9 月

発表者名	発表標題	学会名	開催地	発表年月
Yamada,R, Chiba,Y, Uchigashima,S	Factors determining feeding methods in dysphagic elderly with dementia in Japan	17th Annual Dysphagia Research Society Meeting	New Orleans, US	平成 21 年 3 月

発表者名	発表標題	学会名	開催地	発表年月
Chiba Y, Tohara H	The Effectiveness of swallowing exercise for the elderly persons with using day care.	17 th Dysphagia Research Society Meeting	New Orleans, US	平成 21 年 3 月

* 20

発表者名	発表標題	学会名	開催地	発表年月
川西克弥、田中真樹、鈴木裕仁、豊下祥史、横山雄一、越野 寿、平井敏博	ラットにおける咀嚼動態の変化が血清抗酸化能とスーパーオキシド産生能に及ぼす影響	117 回日本補綴歯科学会	名古屋	平成 20 年 6 月

事業番号	07F001
------	--------

* 21

発表者名	発表標題		
越野 寿、川西克弥、豊下祥史、田中真樹、鈴木裕仁、岩崎一生、平井敏博	脳梗塞後のリハビリテーションへ果たす咀嚼の役割ーモデルラットの作製と研究方法の確立へ向けてー		
学会名	開催地	発表年月	
平成20年度日本歯科補綴学会九州・中国・四国支部合同学術大会	別府	平成20年8月	

* 22

発表者名	発表標題		
鈴木裕仁、田中真樹、川西克弥、豊下祥史、越野 寿、平井敏博	ラットの液体飼料飼育は酸化ストレスを誘導する。		
学会名	開催地	発表年月	
第19回日本咀嚼学会	東京	平成20年9月	

発表者名	発表標題		
越野 寿、横山雄一、平井敏博	摂取可能食品アンケートを用いる全部床義歯装着者の咀嚼能力検査。		
学会名	開催地	発表年月	
第19回日本咀嚼学会	東京	平成20年9月	

* 23

発表者名	発表標題		
鈴木裕仁、越野 寿、平井敏博	ラットの液体飼料飼育が血清抗酸化能に及ぼす影響-電子スピン共鳴装置を用いたスピントラッピング法による測定-		
学会名	開催地	発表年月	
第18回日本磁気歯科学会	埼玉	平成20年10月	

* 24

発表者名	発表標題		
田中真樹、鈴木裕仁、川西克弥、佐々木みづほ、渡部真也、豊下祥史、越野 寿、武田秀勝、藤井博匡、平井敏博	ラットの液体飼料飼育は、酸化ストレスを誘導する		
学会名	開催地	発表年月	
第24回日本ストレス学会	大阪	平成20年10月	

* 25

発表者名	発表標題		
佐々木みづほ、越野 寿、川西克弥、豊下祥史、鈴木裕仁、岩崎一生、平井敏博	咀嚼機能に関する研究のための「一過性脳梗塞モデルラット」の作製		
学会名	開催地	発表年月	
第27回北海道医療大学歯学会	札幌	平成21年2月	

発表者名	発表標題		
Chiba Y, Tohara H.	The Effectiveness of swallowing exercise for the elderly persons wity using day care,		
学会名	開催地	発表年月	
17 th Dysphagia Research Society Meeting	New Orleans US	平成21年3月	

事業番号	07F001
------	--------

発表者名	発表標題		
Koshino H, Matsubara K, Hirai T, Toyoshita Y, Iwasaki	Evaluating Method of Swallowing Function by Swallowing Sound.		
学会名	開催地	発表年月	
86th IADR/AADR/CADR General Session	Toronto	平成 20 年 7 月	

* 26

発表者名	発表標題		
佐々木みづほ、川西克弥、越野 寿、豊下祥史、會田英紀、平井敏博	咀嚼の学習・記憶障害の回復に対する効果 - 脳梗塞モデルラットの観察から -		
学会名	開催地	発表年月	
第 20 回日本咀嚼学会学術大会	福岡	平成 21 年 1 月	

平成 21 年度

発表者名	発表標題		
山田律子	シンポジウムⅡ基調講演「認知症の病型別にみた摂食・嚥下障害の特徴と食事ケア」		
学会名	開催地	発表年月	
第 20 回日本老年歯科医学会総会・学術大会	横浜	平成 21 年 6 月	

発表者名	発表標題		
内ヶ島伸也	認知症高齢者の日常生活ケアに関わる「選択の表明」能力と「論理的思考」能力の特徴		
学会名	開催地	発表年月	
北海道医療大学看護福祉学部学会第 6 回学術大会	札幌	平成 21 年 9 月	

発表者名	発表標題		
山田律子, 千葉由美, 北川公子, 小野塚元子, 鳥田美紀代, 坂井志麻, 長瀬亜岐	介護老人保健施設および療養病床において胃瘻離脱に成功した高齢者の特徴		
学会名	開催地	発表年月	
第 15 回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会	名古屋	平成 21 年 8 月	

発表者名	発表標題		
千葉由美, 山田律子, 坂井志麻, 長瀬亜岐, 北川公子	療養病床における胃瘻栄養法の離脱への取り組みの現状		
学会名	開催地	発表年月	
第 15 回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会	名古屋	平成 21 年 8 月	

発表者名	発表標題		
Chiba Y	Effectiveness of swallowing exercise for the elderly with using day care services in Japan.		
学会名	開催地	発表年月	
4 th ICCHNR	オーストラリアアデレード	平成 21 年 8 月	

発表者名	発表標題		
Kawanishi K, Koshino H, Toyoshita Y, Aita H, Hirai T	Effect of Mastication on Functional Recoveries after the Permanent Middle Cerebral Artery Occlusion Using the Intraluminal Suture Technique in Rat.		
学会名	開催地	発表年月	
The 6th Meeting of Asisn Academy of Prosthodontics(AAP)	Seoul	平成 21 年 4 月	

事業番号	07F001
------	--------

発表者名	発表標題		
川西克弥、越野 寿、豊下祥史、佐々木みづほ、 <u>平井敏博</u>	咀嚼機能が脳梗塞モデルラットの学習・記憶機能の回復に及ぼす影響		
学会名	開催地	発表年月	
第 118 回日本歯科補綴学会	京都	平成 21 年 6 月	

発表者名	発表標題		
川西克弥、越野 寿、豊下祥史、佐々木みづほ、 <u>會田英紀</u> 、 <u>平井敏博</u>	咀嚼機能が脳梗塞発症後の経過に及ぼす影響		
学会名	開催地	発表年月	
第 26 回日本老年学会	横浜	平成 21 年 6 月	

発表者名	発表標題		
<u>Chiba Y</u>	Effectiveness of swallowing exercise for the elderly with using day care services in Japan.		
学会名	開催地	発表年月	
International Conferences on Community Health Nursing Research	アデレード,オーストラリア	平成 21 年 8 月	

発表者名	発表標題		
坂井志麻, <u>千葉由美</u> ,長瀬亜岐,北川公子, <u>山田律子</u> ,他	胃瘻による経管栄養法からの離脱にむけた体制づくりに関する研究 -全国の療養病床に焦点をあてて-		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 14 回学術集会	札幌	平成 21 年 9 月	

発表者名	発表標題		
長瀬 亜岐,坂井 志麻,北川 公子, <u>千葉由美</u> , <u>山田律子</u> ,他	胃瘻による経管栄養法からの離脱にむけた体制づくりに関する研究 -全国の老人保健施設に焦点をあてて-		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 14 回学術集会	札幌	平成 21 年 9 月	

発表者名	発表標題		
<u>千葉由美</u>	デイサービス利用高齢者の摂食・嚥下機能に関する調査		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 14 回学術集会	札幌	平成 21 年 9 月	

発表者名	発表標題		
北川公子, <u>千葉由美</u> , <u>山田律子</u> ,浅川典子, <u>小野塚元子</u> ,他	胃ろう栄養法からの離脱のためのケアプロトコール開発		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 14 回学術集会	札幌	平成 21 年 9 月	

発表者名	発表標題		
<u>千葉由美</u> , <u>山田律子</u> ,北川公子,坂井志麻,長瀬亜岐	療養病床と介護老人保健施設における胃瘻離脱に向けての支援体制の比較		
学会名	開催地	発表年月	
第 29 回日本看護科学学会学術集会	千葉	平成 21 年 11 月	

事業番号	07F001
------	--------

発表者名	発表標題		
千葉由美, 山田律子, 北川公子, 坂井志麻, 長瀬亜岐	胃瘻離脱を導くケアプロトコールの開発に関する事業報告		
学会名	開催地	発表年月	
第 29 回日本看護科学学会学術集会	千葉	平成 21 年 11 月	

発表者名	発表標題		
Ide S, Uchigashima S	Dementia Friendship Club: A trial for developing a community system for people in dementia in Japan.		
学会名	開催地	発表年月	
IAGG World congress of gerontology and geriatrics	France	平成 21 年 7 月	

発表者名	発表標題		
Yamada R., Hagino E., Uchigashima, S., Ide S.	Development of the Guideline to Maintain Oral Ingestion without Depending on Tube Feeding for the Elderly with Dementia		
学会名	開催地	発表年月	
25th annual international conference of Alzheimer's Disease International	Greece	平成 22 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Koshino H, Matsubara K, Hirai T, Toyoshita Y, Iwasaki K	Mastication Promotes Recovery Of Memory And Learning Dysfunction By Middle Cerebral Artery Occlusion In Rats		
学会名	開催地	発表年月	
ICP 13th Biennial Meeting	Cape Town	平成 21 年 9 月	

平成 22 年度

発表者名	発表標題		
Chiba Y, Kitagawa K, Yamada R, Sakai S, Nagase A	A study of tube-free in transitional intermediate institutions.		
学会名	開催地	発表年月	
Dysphagia Research Society	San Diego, US	平成 22 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Sasaki M, Kawanishi K, Toyoshita Y, Aita H, Koshino H, Hirai T	Mastication Accelerates Rehabilitation of Brain Function after Cerebral Infarction		
学会名	開催地	発表年月	
88th General Session & Exhibition of the IADR	Barcelona	平成 22 年 7 月	

発表者名	発表標題		
佐々木みずほ 豊下祥史 川西克弥 越野 寿 平井敏博	脳梗塞モデルラットにおける短期および長期記憶の形成に咀嚼が及ぼす影響		
学会名	開催地	発表年月	
日本咀嚼学会第 21 回学術大会	東京	平成 22 年 10 月	

発表者名	発表標題		
渡部真也 豊下祥史 會田英紀 越野 寿 平井敏博	ラットの液体飼料飼育が脳由来神経栄養因子の発現に及ぼす影響		
学会名	開催地	発表年月	
平成 22 年度 社団法人日本補綴歯科学会 東北・北海道支部学術大会	札幌	平成 22 年 10 月	

事業番号	07F001
------	--------

発表者名	発表タイトル		
佐々木みづほ 豊下祥史 川西克弥 河野 舞 會田英紀 越野 寿	脳梗塞モデルラットにおける後遺障害の回復に咀嚼が及ぼす影響		
学会名	開催地	発表年月	
口腔先端応用医科学 研究会第3回学術会議	東京	平成23年1月	

発表者名	発表タイトル		
枝広あや子, 平野浩彦, 大内ゆかり, 渡邊 裕, 戸原 玄, 千葉由美, 山田律子, 山根源之	認知症高齢者の食行動に関する実態調査報告 第1報 —食事関連BPSD調査票の考案—		
学会名	開催地	発表年月	
一般社団法人日本老年歯科医学会第21回学術大会	新潟	平成22年6月	

発表者名	発表タイトル		
枝広あや子, 平野浩彦, 小原由紀, 大内ゆかり, 大堀嘉子, 渡邊 裕, 戸原玄, 千葉由美, 新谷浩和, 高田 靖, 細野 純, 佐々木健, 那須郁夫, 山田律子, 山根源之, 鈴木隆雄	認知症高齢者の食行動に関する実態調査報告 第2報 —認知症の原因疾患および重症度の視点から—		
学会名	開催地	発表年月	
一般社団法人日本老年歯科医学会第21回学術大会	新潟	平成22年6月	

発表者名	発表タイトル		
新谷浩和, 平野浩彦, 鈴木 央, 山田律子, 細野純, 大堀嘉子, 竹内嘉伸, 枝広あや子, 渡邊裕, 勝田優一, 倉治 隆	認知症高齢者の地域ケア—食事ケアでの歯科支援システムの提案 (大田区での取り組みの概要報告)		
学会名	開催地	発表年月	
一般社団法人日本老年歯科医学会第21回学術大会	新潟	平成22年6月	

*27

発表者名	発表タイトル		
山田律子, 平野浩彦, 枝広あや子, 千葉由美, 戸原玄, 佐々木健, 新谷浩和, 細野 純, 大堀嘉子, 渡邊 裕	認知症高齢者の食行動の特徴—認知症の重症および認知症の原因疾患別の分析*		
学会名	開催地	発表年月	
第16回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会	新潟	平成22年9月	

発表者名	発表タイトル		
平野浩彦, 枝広あや子, 大内ゆかり, 大堀嘉子, 菅 武雄, 渡邊 裕, 戸原玄, 千葉由美, 新谷浩和, 高田 靖, 細野純, 佐々木健, 山田律子, 山根源之	認知症高齢者の食行動実態調査 第1報—認知症重症度別食事関連 BPSD 発生頻度について—		
学会名	開催地	発表年月	
第16回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会	新潟	平成22年9月	

事業番号	07F001
------	--------

発表者名	発表標題		
枝広あや子, 平野浩彦, 渡邊 裕, 戸原玄, 新谷浩和, 高田 靖, 細野 純, 佐々木健, <u>山田律子</u> , 山根源之	認知症高齢者の食行動実態調査 第2報—アルツハイマー型認知症と前頭側頭型認知症の特徴—		
学会名	開催地	発表年月	
第16回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会	新潟	平成22年9月	

発表者名	発表標題		
千葉由美, 市村久美子, 戸原 玄, 石田瞭, 植松宏, <u>山田律子</u> , 植田耕一郎, 唐帆健浩, 加治一毅	病院における摂食・嚥下システム開発に関する基礎調査(報告1)—スタッフ配置と摂食・嚥下関連組織の設置状況		
学会名	開催地	発表年月	
第16回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会	新潟	平成22年9月	

発表者名	発表標題		
平野浩彦, 枝広あや子, 小原由紀, 大堀嘉子, 渡邊 裕, 新谷浩和, 高田靖, 佐々木健, 細野 純, <u>山田律子</u> , 鈴木隆雄	食行動を認知症の進行から考える—どんな行動がいつ起こるのか		
学会名	開催地	発表年月	
第11回日本認知症ケア学会大会(石崎賞:学会賞受賞)	神戸	平成22年10月	

発表者名	発表標題		
千葉由美, 市村久美子, <u>山田律子</u> , 山本則子	一般病院における摂食・嚥下障害患者への体制と胃ろう導入に関する基礎調査		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第15回学術集会	前橋	平成22年11月	

平成23年度

発表者名	発表標題		
佐々木みづほ 豊下祥史 渡辺真也 川西克弥 會田英紀 橋川美子 小西洋次 伊東由紀夫 <u>越野 寿</u> <u>平井敏博</u>	脳梗塞モデルラットにおける神経栄養因子発現への咀嚼の効果		
学会名	開催地	発表年月	
社団法人日本補綴歯科学会 第120回記念学術大会	広島	平成23年5月	

発表者名	発表標題		
Watanabe S, Toyoshita Y, Aita H, <u>Koshino H</u> , <u>Hirai, T</u>	The Effect of Mastication on the Expression of Brain-Derived Neurotrophic Factor in the Rat Brain		
学会名	開催地	発表年月	
14th Biennial Meeting of the International College of Prosthodontists	Hawaii	平成23年9月	

発表者名	発表標題		
豊下祥史 會田康史 額 諭史 川西克弥 會田英紀 守屋信吾 <u>越野 寿</u>	北海道岩内町における特定高齢者候補者の咀嚼機能に関する実態調査		
学会名	開催地	発表年月	
一般社団法人日本老年歯科医学会第22回学術大会	東京	平成23年6月	

事業番号	07F001
------	--------

発表者名	発表標題		
山田律子, 内ヶ島伸也, 千葉由美, 鈴木真理子, 平野浩彦, 枝広あや子	認知症高齢者の摂食・嚥下障害の特徴とケアの方向性—認知症の原因疾患と重症度を踏まえた分析*		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 16 回学術集会(日本老年学会合同ポスターセッションに選定)	東京	平成 23 年 6 月	

発表者名	発表標題		
枝広あや子, 平野浩彦, 山田律子, 千葉由美, 他	アルツハイマー型認知症患者の自立摂食を支援するために—食行動実態調査の結果から—		
学会名	開催地	発表年月	
一般社団法人日本老年歯科医学会第 22 回学術大会(日本老年学会合同ポスターセッション 優秀ポスター受賞)	東京	平成 23 年 6 月	

発表者名	発表標題		
新谷浩和, 平野浩彦, 鈴木 央, 山田律子, 他	在宅認知症高齢者の食事支援での多職種連携構築 Multidisciplinary Approach for In-home Elderly with Dementia through Mealtime Support		
学会名	開催地	発表年月	
一般社団法人日本老年歯科医学会第 22 回学術大会	東京	平成 23 年 6 月	

発表者名	発表標題		
新谷浩和, 平野浩彦, 鈴木央, 山田律子, 他	認知症高齢者の地域ケア—食事ケアの歯科支援システムの提案(大田区での取り組みの概要報告)—		
学会名	開催地	発表年月	
一般社団法人日本老年歯科医学会第 22 回学術大会	東京	平成 23 年 6 月	

発表者名	発表標題		
佐藤絵美子, 平野浩彦, 渡邊裕, 新屋俊明, 戸原玄, 千葉由美, 山田律子, 他	認知症高齢者臭覚機能低下と食事との関連—アルツハイマー型認知症を中心に—		
学会名	開催地	発表年月	
一般社団法人日本老年歯科医学会第 22 回学術大会	東京	平成 23 年 6 月	

発表者名	発表標題		
内ヶ島伸也, 石崎森子, 横山晃子, 蒲原龍	認知症高齢者の日常生活ケアに関わる意思決定能力の特徴—認知機能との関連		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 16 回学術集会	東京	平成 23 年 6 月	

発表者名	発表標題		
内ヶ島伸也, 石崎森子, 蒲原龍, 横山晃子	認知症高齢者の日常生活ケアに関わる意思決定能力の特徴—認知症の原因疾患による比較		
学会名	開催地	発表年月	
日本認知症ケア学会第 12 回大会	横浜	平成 23 年 9 月	

事業番号	07F001
------	--------

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】(萩野・西・中川)

平成 20 年度

発表者名	発表標題		
中川賀嗣, 阿久津由紀子, 大槻美佳, 石田義則	移動動作に重篤な障害を呈した体性感覚障害の 1 例		
学会名	開催地	発表年月	
東北神経心理	仙台	平成 20 年 1 月	

* 33

発表者名	発表標題		
中川賀嗣, 大槻美佳, 上杉春雄, 秋野実, 斎藤久	体性感覚の行為・動作への関与		
学会名	開催地	発表年月	
第 32 回日本高次脳機能障害学会総会	松山	平成 20 年 11 月	

* 34

発表者名	発表標題		
中川賀嗣, 大槻美佳, 田島康敬, 松本昭久	左手一側性に観察された随意動作の障害について		
学会名	開催地	発表年月	
第 32 回日本神経心理学会総会	東京	平成 20 年 9 月	

発表者名	発表標題		
中川賀嗣, 大槻美佳, 松本昭久	複数物品の系列的操作を支える能力		
学会名	開催地	発表年月	
第 32 回日本神経心理学会総会	東京	平成 20 年 9 月	

発表者名	発表標題		
飯田貴映子, 中島紀恵子, 酒井郁子, 諏訪さゆり, 大塚真理子, 坂井さゆり, 得居みのり, 新山真由美, 萩野悦子, 藤田冬子, 淵田英津子, 松澤有夏, 渡辺みどり, 高山紘子	老人保健施設入所者の生活リズム障害へのアセスメントとケアの概念化		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 13 回学術集会	金沢	平成 20 年 11 月	

平成 21 年度

発表者名	発表標題		
Nakagawa Y, Otski M, Tajima Y, Matsumoto A	Inability of voluntary movement of left hand with lesion of corpus callosum		
学会名	開催地	発表年月	
19th Meeting of the European Neurological Society	ミラノ	平成 21 年 6 月	

発表者名	発表標題		
萩野悦子, 酒井郁子, 諏訪さゆり, 根本敬子, 飯田貴映子, 岩鶴早苗, 遠藤淑美, 大塚真理子, 丸山優, 坂井さゆり, 人見裕江, 淵田英津子, 渡辺みどり, 松澤有夏, 渡邊智子	生活リズム障害の発生状況と背景要因の分析 生活リズム障害ケアプロトコル Ver.2 の開発に向けた調査から		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 14 回学術集会	札幌	平成 21 年 9 月	

事業番号	07F001
------	--------

発表者名	発表標題		
遠藤淑美, 萩野悦子, 酒井郁子, 諏訪さゆり, 根本敬子, 飯田貴映子, 岩鶴早苗, 大塚真理子, 丸山優, 坂井さゆり, 人見裕江, 淵田英津子, 渡辺みどり, 松澤有夏, 渡邊智子	生活リズム障害の発生状況と背景要因の分析 生活リズム障害ケアプロトコル Ver.2 の開発に向けた調査から		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 14 回学術集会	札幌	平成 21 年 9 月	

* 32

発表者名	発表標題		
Hagino E, Nakagawa Y, Nishi M	Examination through Literature Review on problems involved in sleep care for elderly people with cognitive impairment *		
学会名	開催地	発表年月	
25th annual international conference of Alzheimer's Disease International	Greece	平成 22 年 3 月	

発表者名	発表標題		
Yamada R., Hagino E., Uchigashima, S., Ide S.	Development of the Guideline to Maintain Oral Ingestion without Depending on Tube Feeding for the Elderly with Dementia		
学会名	開催地	発表年月	
25th annual international conference of Alzheimer's Disease International	Greece	平成 22 年 3 月	

平成 22 年度

* 35

発表者名	発表標題		
萩野悦子, 鈴木真理子, 中川賀嗣, 西基	睡眠障害をもつ認知症高齢者に高照度光を用いたケアの効果		
学会名	開催地	発表年月	
第 11 回日本認知症ケア学会大会	神戸	平成 21 年 10 月	

平成 23 年度

発表者名	発表標題		
萩野悦子, 寺下いずみ, 三浦加奈子, 七尾雅子, 川筋奈緒美, 福士友紀, 中澤朋子	腎・泌尿器疾患の予定手術を受ける高齢者の手術前後の活動量と睡眠パターンの変化		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 16 回学術集会	東京	平成 23 年 6 月	

発表者名	発表標題		
寺下いずみ, 萩野悦子, 三浦加奈子, 七尾雅子, 川筋奈緒美, 福士友紀, 中澤朋子	腎・泌尿器疾患の予定手術を受ける高齢者のせん妄発症パターンと発症要因-日本語版ニーチャム混乱・錯乱スケールの特典変化に注目して		
学会名	開催地	発表年月	
日本老年看護学会第 16 回学術集会	東京	平成 23 年 6 月	

発表者名	発表標題		
寺下いずみ, 萩野悦子	腎・泌尿器疾患の予定手術を受ける高齢者のせん妄発症要因		
学会名	開催地	発表年月	
北海道医療大学看護福祉学部第 8 回学術大会	札幌	平成 23 年 9 月	

事業番号	07F001
------	--------

発表者名	発表標題		
萩野悦子, 寺下いずみ	腎・泌尿器疾患の予定手術を受ける高齢者の周手術期における活動量と睡眠状態の変化		
学会名	開催地	発表年月	
日本睡眠学会第36回学術集会	京都	平成23年10月	

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】
(阿保・薄井・花淵・小野・櫻井／池田)

平成22年度

発表者名	発表標題		
櫻井潤	アメリカの公的医療保険と地域保険市場: 処方薬給付の創設と民間プランの普及		
学会名	開催地	発表年月	
日本財政学会	滋賀県(滋賀大学)	平成22年10月	

【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割】(近藤)

平成20年度

発表者名	発表標題		
近藤里美	Arts Based retreat for music therapist working in Hospice/Palliative Care		
学会名	開催地	発表年月	
12 th World Congress of Music Therapy	Brisbane, Australia	平成20年7月	

発表者名	発表標題		
近藤里美	Voices: 音楽療法がもたらしているもの		
学会名	開催地	発表年月	
北海道医療大学看護福祉学部学会学術大会	札幌	平成20年9月	

平成22年度

発表者名	発表標題		
近藤里美	音楽療法の学びなおしの意味するもの		
学会名	開催地	発表年月	
第10回 日本音楽療法学会学術大会	神戸	平成22年9月	

平成23年度

発表者名	発表標題		
近藤里美	Possibility of qualitative data analysis method SCAT		
学会名	開催地	発表年月	
13 th World Congress of Music Therapy	Seoul, Korea	平成23年7月	

＜研究成果の公開状況＞(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

＜既に実施しているもの＞

- 平成 19 年 1 月 27 日 学術フロンティア公開シンポジウム
会場:京王プラザホテル札幌 (参加者:300 名)
10:00～12:30 「虚構としての認知症ケア-ためらうことの意味」
13:00～15:00 「明日の認知症ケアをもとめて」
- 平成 19 年度文部科学省学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業研究成果報告会
日時:平成 20 年 9 月 4 日 16:00～19:30
会場:北海道医療大学札幌サテライトキャンパス(参加者:80 名)
- 北海道医療大学広報誌 ADVANCE No.137 p.4, 平成 20 年 12 月 26 日発行
平成 19 年度文部科学省学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業研究成果報告会の実施に関する紹介記事
- 日本私立看護系大学協会会報 No.21 平成 21 年 5 月 1 日発行, p9-10
加盟校のユニークな取り組み「学術フロンティア推進事業「認知症高齢者のトータルケアに関する学際的研究」にて内容紹介
- 平成 21 年 9 月 27 日 一般公開シンポジウム
会場:札幌コンベンションセンター大ホール(参加者:60 名)
14:30～16:30 「認知症ケアにおける臨床の知」
(日本老年看護学会第 14 回学術集会共催)
- 平成 21 年度文部科学省学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業研究成果報告会
日時:平成 22 年 2 月 6 日 9:30～12:30
会場:北海道医療大学札幌サテライトキャンパス
- 平成 22 年 2 月 6 日 学術フロンティア公開シンポジウム「脳機能と認知症治療・ケアの最前線」
会場:ACU中研修室L(参加者:180 名、アンケート回収 77 名)
14:00～14:45 基調講演
15:00～16:30 公開シンポジウム「咀嚼と高次脳機能」「認知症の薬物治療～その効果と限界～」
「認知症の人の食べるよろこびを支えるために～脳機能をふまえた食事ケア～」
- 平成 23 年 7 月 30 日 学術フロンティア公開シンポジウム「認知症高齢者のトータルケア-脳・生き方・暮らしが交錯する場の知-」
会場:札幌パークホテル(事前申込者:956 名、参加者 716 名)
13:00～14:10 基調講演「認知症医療-診断から生活支援まで-」
14:30～16:30 シンポジウム「脳のしくみと認知症症状」「意識と自己の情報学」「老いをどう受け止めるか」
- 平成 22 年度文部科学省学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業研究成果報告会
日時:平成 23 年 9 月 4 日 9:30～12:30
会場:北海道医療大学札幌サテライトキャンパス

[シンポジウム・学会等の招聘講演]

本研究の成果を、学会等で招聘された基調講演や教育講演などで紹介した。

山田律子:第9回日本認知症ケア学会大会(高知) 教育講演「摂食・嚥下」(平成19年度の国内外文献検討の結果を踏まえた認知症の摂食・嚥下機能の特徴について講演した)平成20年9月26日(812人)

* 12

山田律子:日本老年歯科医学会総会・学術大会(横浜)シンポジウムⅡ 基調講演「認知症の病型別にみた摂食・嚥下障害の特徴と食事ケア」(平成19～21年度にまでの本研究成果に基づく講演内容)平成21年6月19日(600人)

* 13

- 山田律子:病院歯科介護研究会第 13 回総会・学術講演会(岡山) 基調講演「認知症の原因疾患別にみた摂食・嚥下障害と食事ケア」(平成 19～22 年度までの本研究成果に基づく講演内容) 平成 22 年 10 月 10 日(550 人)
- 山田律子:第 23 回老人福祉施設職員研究会(大阪) 記念講演「認知症の人の美味しく豊かな食事に向けて」講演 平成 23 年 2 月 8 日(400 人)
- 山田律子:第二回日本認知症グループホーム大会(東京) 教育講演「認知症の人の食べる喜びに向けて～脳機能を踏まえた食事ケア 平成 23 年 9 月 15 日(1,000 人)
- 中川賀嗣:小樽市認知症高齢者グループ ホーム連絡協議会「脳機能と認知症について」中核症状と周辺症状・ケアのあり方(小樽) 平成 22 年 6 月 26 日
- 中川賀嗣:認知症学会スポンサーシップシンポジウム(名古屋) 認知症性疾患の行為障害の特徴とそのメカニズム 平成 22 年 11 月 7 日
- 阿保順子:日本保健福祉学会 特別講演「認知症の人から見える世界」平成 22 年 10 月 30 日
- 阿保順子:日本精神科看護技術協会長野県支部 50 周年記念 講演「認知症の人々が創り上げている生活世界」平成 22 年 11 月 26 日
- 阿保順子:認知症ケア学会研修会講演:「認知症高齢者が創り上げている生活世界に沿ったケアの可能性」平成 23 年 3 月 12 日
- 阿保順子:駒ヶ根市主催「認知症を考える市民シンポジウム」講演:「認知症の人の想いを探り、ケアを考える」平成 23 年 3 月 26 日

【インターネットでの公開】

- 文部科学省学術フロンティア推進事業「認知症高齢者のトータルケアに関する学際的研究」ホームページ(これまでの研究活動や報告書(PDF ファイル)などを掲載)
http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~gakumu/gp/f_ninchi/report.html
- インターネット交流サイト「フェースブック」における認知症に関する情報の公開(工藤・竹生)
 本事業によるシンポジウムに関する報告要旨と個人の見解を公開している。
<http://facebook.com/yoshiko.kudo>
- * 28
 山田律子:「認知症の人の食事支援に関する指針(認知症の方の食べる力を高めるために)」(本研究成果をもとに、認知症の人の食事ケア指針について、専門職と一般の人向けの2タイプに分けて紹介。また研究の成果物としてのパンフレットPDFファイルで掲載、自由に印刷して使用できるようにした。)
<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~rounen/yamada/yamada.htm>
- * 29
 山田律子:NHKでも紹介されたパンフレット「認知症の人のおいしく豊かな食事に向けて」を掲載
<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/news/diary.cgi?no=45>
 ※その他、種々のホームページで、このURLのリンクが貼られている
- 山田律子:本研究の成果のエッセンスを説明したものを You Tube で紹介
 (岡山で開催された病院歯科介護研究会第 13 回総会・学術講演で招請された特別講演に先駆けて紹介されたもの)
<http://www.youtube.com/watch?v=JsPov23SPTc>
- 山田律子:読売新聞に本研究成果が掲載されたときの記事
<http://www.yomidr.yomiuri.co.jp/page.jsp?id=27233>
- 山田律子:受験生向けのリクルートのホームページで、本研究について紹介
<http://shingakunet.com/net/sensei/detail/SC000533/9000386145>

事業番号	07F001
------	--------

千葉由美:摂食嚥下友の会

<http://engetomo.umin.jp/member/members.html>

<これから実施する予定のもの>

山田律子:第4回日本健康医療学会総会・学術大会 市民公開講座「認知症の人の明るく健やかな暮らしに向けて」平成23年10月2日(札幌)

山田律子:第9回日本通所ケア研究大会(合同開催:第7回認知症ケア研修会)セミナー「ワンランクアップのための認知症高齢者への食事ケア」平成23年11月27日(広島)(1回300人を2回実施予定)

阿保順子:第13回日本看護救急看護学会学術集会教育講演「認知症老人の世界を理解して救急看護に生かす」平成23年10月22日(神戸)

阿保順子:第27回認知症の人と家族への援助をすすめる全国研究集会「認知症の人々は世界をどう創造していくのかーその思いと生きる力」平成23年10月30日(長野)

13 その他の研究成果等

【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動】(井出・森田・森)

- 平成20年11月石狩市筋力トレーニング教室講演会にて前年度実施の同教室における認知機能および身体資質に関する成果について公表した。また、平成21年2月に江別市健康づくり教育評価研修会にて同様の公表を行った。
- 平成22年6月29日 UHB(北海道文化放送)「のりゆきのトーク DE 北海道」介護うつにならないために:認知症の方へのサポートおよび認知症フレンドシップの活動に関するコメント
- 平成22年10月30日 HTB(北海道テレビ)「道民カレッジ大学放送講座」平成22年度「ほっかいどう学」第5回:「地域で支える認知症～認知症フレンドシップクラブの現場から」において、活動支援の状況を紹介した。
- UHB(北海道文化放送)「石井ちゃんと行く!」
「RUN 伴トモロウ～認知症フレンドシップクラブ」で、認知症の人の活動支援が紹介された。
- 平成23年8月4日 北海道新聞 「認知症ランナー たすきつなぎ 300K」
予防的な活動として続けている認知症の人の活動支援の記事が北海道新聞に掲載された。
- UHB(北海道文化放送)「石井ちゃんと行く!」
「認知症 みんなで走ればコワくない!」で、認知症の人の活動支援が紹介された。

【地域における住民参加型活動の開発と評価】(工藤・竹生・川添)

工藤禎子:当別町介護者とともに歩み会 10周年記念講演「認知症の人と家族が望む暮らしを実現していくために」平成18年9月

竹生礼子:札幌市西区「老老介護を学ぶ会『きずな』」健康講座において、認知症の人との接し方について講話を実施。平成23年1月11日

竹生礼子:カナダ アルバータ州立 Royal Alexandra Hospital を訪問し、Palliative Care Program(緩和ケアチーム)のNPおよびCNSにインタビューを実施。認知症とがんを併発した高齢者に対するアセスメント方法やケア、療養場所の選択について、情報収集するとともに、カナダの地域看護学研究者・実践者と意見交換をした。成果として、がんをもつ認知症高齢者の適切な療養場所を、地域全体で検討する仕組の重要性が明らかになり、本研究プロジェクトの認知症の人が暮らしやすい地域づくりの考察に活かすことができた。平成23年5月4日

竹生礼子:「これからの人生に役立つ!健康教室」

3 市区町村において、一般住民対象の認知症に関する健康教室を行い、啓発普及の実践をしている。実施実績は以下であり、いずれもテーマは『認知症になっても地域で安心して暮らす!』

事業番号	07F001
------	--------

【札幌市白石東地区センター】 平成 23 年 8 月 6 日 9 人参加

【当別町総合保健福祉センター】 平成 23 年 9 月 7 日 9 人参加

【新篠津村第 1 老人クラブ】 平成 23 年 8 月 1 日 50 人参加

【新篠津村中央老人クラブ】 平成 23 年 8 月 12 日 32 人参加

竹生礼子：当別町地域ケア会議介護予防専門部会の委員として、地域の保健医療福祉、介護職等との事例検討会に出席。アドバイザーとして、重度の認知症の人や家族の支援の質の向上に寄与した。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)

○地方公共団体や職能団体などから依頼された講演や研修会で、本研究の成果を紹介した。対象者は、介護職や看護職、医師、薬剤師、歯科医師、歯科衛生士、管理栄養士、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士などの専門職や、公開講座等では一般市民にも多く参加いただいた。

山田律子：高齢者の看護Ⅱ研修会-高齢者の尊厳と安全を守るために「高齢者の尊厳と認知症ケア」(北海道看護協会主催)札幌(109人)、平成20年1月15日

山田律子：認知症高齢者ケア研修会「認知症高齢者の看護の基本」(北海道看護協会主催)札幌(205人)平成20年1月29日

山田律子：地域ケアサービス事業者等技術育成講座「認知症ケアを学ぼう～施設における認知症ケアを中心に」(北海道上川保健福祉事務所名寄地域保健部主催)旭川(100人)、平成20年10月27日

山田律子：「認知症の方に対する食事ケア研修会」(日本通所ケア研究会主催)広島県福山市(200名)、平成20年12月13・14日(主に介護職・看護職に、2日間に渡るプログラムの中で、研究成果を丁寧に解説すると共に、演習を組み実践にすぐに役立つように講演を行った)

山田律子：当別町地域ケア会議主催公開講座「認知症の人の心理・行動と対応－輝きある人生を支えるために」、平成21年7月22日

山田律子：北海道訪問看護ステーション連絡協議会主催「生活機能に視点を置いた看護過程の展開」(特に認知症高齢者の食事支援を例に)、平成21年10月17日

山田律子：文部科学省社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム 地域格差のない医療情報提供のための薬剤師・看護師教育プログラム「認知症の人の理解に向けて」、平成21年11月7日

山田律子：北海道歯科医師会主催 市民公開講座「食べるよろこび 生きるよろこび-認知症と食支援」(330人)、平成21年11月14日(市民向けに研究成果をわかりやすくまとめて講演)

山田律子：東京都大田区大森歯科医師会主催 平成21年度健康フォーラム「認知症の食事ケア～食べることを支えるための地域支援」基調講演、平成21年12月5日

山田律子：北海道歯科医師会主催「認知症患者への歯科医療・口腔ケアセミナー」基調講演、平成22年2月27日

山田律子：中堅介護職のための総合的・専門的・継続的研修コース「熟練者指向のキャリアアップ～職場に活かす「食」のアプローチ」公開講座「認知症の症状に応じた食事ケアの工夫」、上智大学、平成22年4月17日

山田律子：公開講座「摂食困難のある認知症患者へのアプローチ」、食・口腔・嚥下ケア専門スタッフ養成コース、十勝歯科医師会主催、帯広、平成22年5月21日

山田律子：社会福祉法人博栄会 ケアハウスつかさ研究会「高齢者の栄養摂食・虐待について、平成22年6月5日

山田律子：公開講座「認知症の人の食べるよろこび」、上川地区研修会、旭川(200名)、平成22年7月24日

山田律子：公開講座「認知症の方の食事への配慮」、深川歯科医師会主催多職種研修会、東京、平成22年7月29日

山田律子：「認知症高齢者の摂食・嚥下障害と援助方法」、千歳市複数連携事業主催、千歳、平成22年8月23日

事業番号	07F001
------	--------

山田律子:日本老年看護学会ワークショップ「食事機能の再獲得:経管栄養から経口へ」、生活機能再獲得のためのケアプロトコール実践編.東京、平成22年8月29日

山田律子:公開講座「認知症患者の食事への関わり」、江別市立病院主催研修会、江別、平成22年9月7日

山田律子:認知症高齢者の摂食・嚥下障害の特徴と食事支援、恵庭市グループホームネットワークの会主催、恵庭、平成22年9月13日

山田律子:東日本学園後援会 関東支部主催講演会「認知症高齢者の食べるよろこびを支えるために～北海道医療大学だからこそ可能なチームアプローチ 東京、平成22年11月3日

山田律子:当別町介護者と共に歩む会主催 生会アルツハイマーデー記念講演会「認知症の人の食べる喜びを支えるために」 当別町、平成22年11月8日

山田律子:岩手県介護老人保健施設協会主催 教育講演「認知症の人のおいしく豊かな食事に向けて 岩手県、平成22年11月15日(管理栄養士・調理師を対象とする講演会)

山田律子:医師歯科医療連携フォーラム 認知症の人の食事と医療連携「認知症の人の食べるよろこびを地域で支えるために」 旭川、平成22年11月27日

山田律子:日本看護科学学会「摂食嚥下障害看護のためのケアプロトコールの臨床・研究・教育場面での活用法」 東京、平成22年12月4日

山田律子:大田区大森歯科医師会主催「認知症高齢者の食事ケアを知ろうー認知症高齢者の食事ケア」 東京、平成22年12月5日

山田律子:介護予防従事者研修会「高齢者の口腔機能向上と栄養改善」 札幌、平成22年12月13日

山田律子:社団法人日本看護協会「これからの特別養護老人ホームにおける看護リーダー養成研修「認知症のケア」(生活支援として認知症の人の食事支援に関する本研究成果を盛り込んだ)東京、平成23年1月28日

山田律子:北海道医療大学セミナー「摂食・嚥下障害のある認知症高齢者の食事ケア」 札幌、平成23年3月12日

山田律子:学際医療栄養セミナー「認知症の人の美味しく豊かな食事提供に向けて」東京、平成23年6月19日 大阪、平成22年6月26日

山田律子:北海道栄養士会(生涯学習研修会)「認知症の人にとってのおいしい豊かな食事に向けて」、札幌、平成23年7月3日

山田律子:新潟県老人福祉施設協議会(栄養・調理職員研究部会)講演「認知症の人の美味しく豊かな食事に向けて」(200名)、平成23年8月1日

山田律子:第1回認知症ケアフォーラム 基調講演「認知症高齢者の補水管理・摂食支援(千歳) 平成23年8月20日

千葉由美:松戸市研修会「食物の取りこみ、飲みこみ(摂食(せつしょく)・嚥下(えんげ))のお話し」、平成21年10月5日

千葉由美:東京都健康長寿医療センターエキスパートコース研修講師「摂食嚥下障害看護」、平成21年10月9日

千葉由美:千葉県立保健医療大学主催市民公開講座「食物の取りこみ、飲み込み・嚥下のお話し」、平成21年10月17日

千葉由美:東京都健康長寿医療センターNST 主催講演会「摂食嚥下チームアプローチのコツー経験を通じてー」、平成21年10月30日

千葉由美:三楽病院主催「摂食・嚥下障害へのアプローチ」、平成21年11月16日

千葉由美:摂食・嚥下友の会主催セミナー「摂食・嚥下障害のスクリーニング・評価法」、平成21年11月23日

千葉由美:浴風会病院研修会「摂食・嚥下障害のある患者の看護」、平成21年12月4日

千葉由美:摂食嚥下友の会セミナー「摂食嚥下障害を有する人への対応」、平成22年3月27日

千葉由美:摂食・嚥下障害看護認定看護師非常勤講師(日本赤十字広島看護大学)、平成22年8月3日

千葉由美:厚生労働省モデル事業「介護サービス指導者等養成研修等事業(特別養護老人ホームにおける看護職員と介護職員のケア連携協働のための研修事業)」指導看護師養成研修・講師、平成 22 年 8 月 20 日

千葉由美:東京都歯科衛生士学校(高齢者看護)非常勤講師、平成 21 年 9 月 6 日

千葉由美:摂食・嚥下友の会主催セミナー「摂食・嚥下障害のスクリーニング・評価法」、平成 22 年 8 月 7 日

千葉由美:福島県看護協会研修会「摂食嚥下障害がある人への支援」、平成 22 年 11 月 29 日

千葉由美:独立行政法人健康長寿医療センター研修会「摂食・嚥下障害患者のケア」、平成 22 年 10 月 29 日

千葉由美:摂食・嚥下障害看護認定看護師非常勤講師(茨城県立医療大学)、平成 22 年 12 月 15 日

内ヶ島伸也:札幌市月寒公民館創造学園「認知症を知ろう・考えよう」講師、札幌、平成 20 年 10 月 3 日

内ヶ島伸也:認知症介護市民講座フォーラム「認知症になっても安心して暮らせる街づくり」講師、認知症介護研究・研修仙台センター主催、仙台、平成 20 年 10 月 11 日。

内ヶ島伸也:札幌市月寒公民館創造学園「認知症を知ろう・考えよう」講師、札幌、平成 21 年 10 月 8 日

内ヶ島伸也:平成 22 年度第 1 回認知症介護指導者養成研修「地域連携の理解(シンポジウム)」講師、認知症介護研究・研修仙台センター主催、仙台、平成 22 年 5 月 19 日

内ヶ島伸也:平成 22 年度第 2 回認知症介護指導者養成研修「地域連携の理解(シンポジウム)」講師、認知症介護研究・研修仙台センター主催、仙台、平成 22 年 9 月 8 日

内ヶ島伸也:札幌市月寒公民館創造学園「認知症を知ろう・考えよう」講師、札幌、平成 22 年 10 月 5 日

内ヶ島伸也:平成 22 年度第 3 回認知症介護指導者養成研修「地域連携の理解(シンポジウム)」講師、認知症介護研究・研修仙台センター主催、仙台、平成 22 年 12 月 8 日

[テレビ・ラジオ・新聞など報道関係]

平井敏博:北海道新聞「脳梗塞からの回復 そしゃくが有効」平成 21 年 8 月 19 日

* 30

山田律子:NHK「おはよう日本」「食のバリアフリー・認知症の方々の摂食困難と環境づくり」(研究成果に基づく支援方法について解説し、実際に認知症高齢者に対して実践の場で行っていたき介入前後にみる変化を映像で示す)平成 21 年 10 月 26 日

山田律子:読売新聞 北海道 歯・口腔健康づくり 8020 認知症の人の食べるよろこびを支えるために (研究成果に基づき市民向けに講演した内容が掲載) 平成 21 年 12 月 15 日

山田律子:介護新聞 「摂食困難のある認知症者へのアプローチ」平成 22 年 3 月 4 日

* 31

山田律子:NHK「ニュースウォッチ 9」(研究成果に基づく援助方法により認知症高齢者の食事行動が変化した事例とコメント、成果物のパンフレットが紹介された) 平成 22 年 5 月 14 日

山田律子:読売新聞 「くらし家庭」 認知症であっても口から食べたい 食器に配慮集中助ける (研究成果に基づき摂食困難に対する環境づくりについてコメント) 平成 22 年 6 月 26 日

山田律子:HBC ラジオ「想い出レストラン 8020」もう一度味わいたい料理について語り、家族や友人など大切な方たちと楽しい食事をする「幸せな時間」を過ごすためにも「歯・口腔の健康」の必要性について本研究成果を踏まえて述べた)、平成 22 年 10 月 26 日

山田律子:キャンパス 往来 認知症患者の食事ケアをテーマに執筆、ベストナース、21(12)、平成 22 年 12 月(記事として本研究が紹介された)

山田律子:北海道新聞「若年認知症 家族も苦悩」コメント平成 23 年 8 月 22 日

山田律子:看家広報 はなえみ「認知症の人のおいしく豊かな食事に向けて 平成 23 年 8 月 25 日

(研究成果に基づき、認知症高齢者の食事支援のポイントをトップ記事で紹介した)

千葉由美:NHK 総合テレビ(首都圏ネットワーク)出演 平成 21 年 10 月 14 日

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】(萩野・西・中川)

萩野悦子:「高齢者の眠りの支援」恵庭障害老人と共に歩む会(恵庭)平成 22 年 4 月 26 日

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】(阿保・薄井・花淵・小野・櫻井／池田)

<講演>

阿保順子:日本精神科看護技術協会(山形)講演:「認知症の人々の理解とアプローチー語られなかった言葉を探してー」平成 21 年 6 月

阿保順子:江別市教育委員会講演:「認知症の新しいアプローチ」平成 22 年 1 月

阿保順子:創造学園31塾:講演「認知症の人々の理解とアプローチ」平成 22 年 1 月

阿保順子:NPO 法人駒の杜 5 周年記念講演 「障害者が地域で暮らすことへのサポートについて」平成 22 年 5 月

阿保順子:長野県看護大学公開講座講演:「認知症の人々が創りあげている世界」平成 22 年 7 月

阿保順子:拘束最少化研究会 講演「拘束は看護技術ではない」平成 22 年 7 月 17 日

阿保順子:愛知医科大学大学院特別講義 講演「拘束は看護技術ではない」平成 22 年 11 月 6 日

阿保順子:駒ヶ根病院看護部研修会講演:「精神科看護コト始め」平成 23 年 4 月

阿保順子:長野県看護部長会講演:「長野県看護大学の目指す教育と臨床看護現場への期待」平成 23 年 5 月

阿保順子:長野県栄養士会研修講演:「認知症の人々が創りだしている世界」平成 23 年 7 月

阿保順子:スマート介護・福祉研究会講演「認知症の人々の世界」平成 23 年 9 月 7 日

池田光穂:「ものづくり・創造性教育のための PBL 入門:医学教育の先行事例から学ぶ」『第6回ものづくり・創造性教育に関するシンポジウム 講演アブストラクト集』Pp.9-22、大阪大学工学部／大学院工学研究科創造工学センター、平成 20 年 11 月 26 日

<特別記事>

阿保順子:アーサー・クライマンとの 150 分ー認知症の人々との人間的相互作用と倫理的関係 看護教育 48(12) 1072-1077 2008

【テレビ・ラジオ・新聞など報道関係】

<新聞連載>

* 45

阿保順子:心はいつまでもー認知症の人々の世界(15 回連載) 共同通信社 平成 23 年

阿保順子:駒ヶ根市主催「認知症を考える市民シンポジウム」講演:「認知症の人の想いを探り、ケアを考える」平成 23 年 3 月 26 日の記事は、中日新聞・長野日報で紹介された。

【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の可能性】(近藤)

<学会講演>

近藤里美:「緩和ケアと音楽療法」第 7 回日本音楽療法学会学術大会 平成 19 年 9 月

近藤里美:「ケアする人のためのケア:音楽がもたらす場」緩和医療学会 平成 20 年 5 月

近藤里美:「いのちと音」日本ホスピス・在宅ケア研究会 第 18 回鳥取大会 平成 22 年 7 月

近藤里美:「医療の中の音楽療法」第 55 回 北海道リハビリテーション学会 札幌
平成 22 年 7 月

近藤里美:「音楽である私たち:音楽療法から学ぶ」あいちホスピス研究会公開講座
平成 23 年 4 月

<高齢者を対象とした地域での講習会>

近藤里美:「音楽療法」池田町シニアカレッジ遊ゆう大学 平成 20 年 9 月

近藤里美:「音楽でからだと心をリフレッシュ」北海道医療大学生涯学習講座平成 20 年 9 月

近藤里美:「人と音楽の深い繋がり」石狩市はまなす学園 平成 22 年 10 月

近藤里美:「音楽療法を通じて私たちと音楽の繋がりを学ぶ」札幌市豊平区創造学園
平成 22 年 11 月

<介護職員を対象にした地域での講習会>

近藤里美:「音楽療法」 石狩地域リハビリテーション講習 石狩市 平成 22 年 3 月

14 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項とそれへの対応

<「選定時」に付された留意事項>

留意事項が付されていない場合は「該当なし」と記載してください。

研究内容がやや不明瞭だが、研究成果の実用化を期待できる。今後は、研究計画等を具体化したうえで、研究を進めることを期待する。なお、3 年目の中間評価において、上記留意事項を含め、進捗が見られない場合は、補助の打ち切りまたは研究費を減額することがあるので留意されたい。

<「選定時」に付された留意事項への対応>

付された留意事項に対し、どのような対応策を講じ、また、それにより、どのような成果があがったか等について、詳細に記載してください。

選定時に付された留意事項である「研究内容の不明瞭さ」については、中間報告において非常に具体的な成果をおさめつつあると報告した。完成年次である平成 23 年度には、研究成果の概要 10 (4)にも記載したように、各グループで具体的な成果を上げている。【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動】においては、健康高齢者における運動の効果と認知症高齢者外出支援ボランティアの要請と派遣までこぎつけている。【地域における住民参加型活動の開発と評価】では、北海道において認知症キャラバンメイトの活動を今後どのようにしていくべきか、北海道庁及び札幌市に報告し共有できたことにより、認知症予防活動の推進の一翼を担うという具体的な成果を上げている。【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】グループは、平成 21 年度の中間報告時までは国内外の文献検討や実験研究、実態調査に基づく評価方法の検討といった基礎的研究だったが、平成 22 年度以降はこれらの研究を基盤に研究成果の実用化に向けたパンフレットの作成や介入研究を実施してきた。この成果は、NHK全国放送やラジオ、新聞などさまざまなメディアを通して報道され、その結果、多くの学会はじめ全国各地の公的団体や職能団体等から講演依頼があり、聴衆も介護職や看護職、管理栄養士、歯科医師、歯科衛生士、薬剤師、言語聴覚士等といったさまざまな専門職から、一般市民に向けた公開講座なども数多く実施する機会が得られた。さらに、講演によっては質疑応答だけで 30 分から1時間半をもち、現場の中で対応に苦慮する事例も多数、質問として出されることも多い。今回の研究成果をもとに今後のケアの方向性を具体的にコメントしたり、昨今は困難事例をもとに現場のさまざまな食事ケアの工夫を聴衆にも語ってもらったりすることで、双方向の実践知の共有ができる場にもなっている。【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】においては、臨床ですぐに用いられるアセスメント指標の完全な開発までは至らなかったが、睡眠状態を測定する際の方法やポイントについての改良まではこぎつけている。【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】では、研究の前半では、認知症高齢者の会話における葛藤状態を緩和するための「会話分析プロファイル」の日本語版の作成や、身体合併症と攻撃行動の関係を明らかにした。後半では、認知症高齢者の生活世界、とりわけ、見当識障害が起こってくる順序、言葉が失われていく順序、それに伴って相互作用から撤退していく順序など、彼らがとる行動上の特徴から明らかにすることができた。それらによって、攻撃行動への対処の仕方や、認知症の進行に沿った生活支援の準備を整えることができるようになるのは、具体的な成果である。これらの成果は著書にまとめられ、また、新聞記事(共同通信)の連載になったことで、多くの人々に知られるところとなった。その結果、学会や自治体、介護職の集まりや家族の会などからの講演依頼に結びつき、ケアの方向性を伝えることが可能になった。【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の可能性】では、在宅や施設あるいは病院など、それぞれの場所でできる療法的な視点をもつ具体的な音楽の提供を促すことができるようになったという点では、ターミナル期での音楽療法の実現化にとって具体的な成果であると言える。

<「中間評価時」に付された留意事項>

留意事項が付されていない場合は「該当なし」と記載してください。

1. 研究組織について

- ・各研究グループ内のチームワークは良好と思われるが、研究グループ間の連携にさらに努めていただきたい。
- ・看護の専門家だけでなく、介護の実務者も入れる必要がある。疾病者の現場では実践から得られる問題点の把握が重要であるから。

2. 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等について

- ・国際誌における論文発表が少ない。
- ・認知症の患者に対する予防活動や評価が行われたことは評価できる。症状は定型的なものと不定型的なものがあり、さらなる丁寧な取組が必要。

3. その他(選定時「留意事項」への対応状況等)

- ・ラットを用いた実験が果たして有効か。

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

付された留意事項に対し、どのような対応策を講じ、また、それにより、どのような成果があがったか等について、詳細に記載してください。

1. 研究組織について

<各グループ間の連携について>

- (1)グループ間の連携は、毎年開催される研究成果報告会において、外部の研究者を交えてディスカッションしている。
- (2)研究成果報告会におけるディスカッションで出されたことを参考に、研究責任者が招集する会議(研究成果報告会の後に開催している)において、さらにディスカッションされ、各グループの翌年の研究活動に反映している。
- (3)密接に関連するグループ間では、同じフィールドで調査研究し、年に 2～3 回のグループ連携会議もっている場合もある。特に、摂食・咀嚼・嚥下機能の評価に際しては、睡眠・覚醒リズムの評価も不可欠であり、【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】と【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】グループの研究は、平成 22 年度には同じフィールドを使用している。その結果、睡眠・覚醒リズムが乱れた対象者の食事ケアに際して、非常に有益な示唆を得ることができ、そのことは成果物のパンフレットにも反映した。また【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】は、高次脳機能科学的研究との比較検討や、摂食・嚥下機能との関係が重要であることから、今述べた二つのグループとのディスカッションを行っている。

<看護の専門家だけでなく、介護の実務者も入れる必要がある。疾病者の現場では実践から得られる問題点の把握が重要であるから。>

- (1)これまで記載はしてこなかったが、【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】の 3 グループの研究において、認知症高齢者の日常生活(調査の前後、調査者不在の時など)の様子の聞き取り、介入の実際、意見の聴取、評価など、研究を進めていく過程には常に介護者を入れている。特に平成 22～23 年度の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価の介入研究は、まさに介護の実務者の協力のもと実施した研究である。
- (2)【地域における住民参加型活動の開発と評価】においては、本グループ研究から派生し、継続して行っているアクションリサーチにおいて、竹生が中心となり、地域ケア会議の介護予防部会、各地での健康教室等の場で、介護職・福祉職をメンバーに加え、認知症のケアについて、介護の視点から市民に予防的に啓発する活動を発展させている。
- (3)【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】の成果に関する講演時の参加者の多くが介護職である。

また講演やセミナー時の質疑応答を通じて、現場における困難事例なども介護職から多く出されるが、それに対して研究成果に基づきコメントすると方向性が見い出せたと喜ばれることも多い。昨今は、介護職が実施した成果(効果)をメールや電話などでフィードバックして下さる施設もあり、今後、本研究課題を継続的かつ発展的に遂行していく上でも参考になっている。

2. 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等について

<国際誌における論文発表が少ない>

中間評価の留意事項を踏まえ、以下の努力をしている。

(1)【地域における住民参加型活動の開発と評価】

工藤他:研究成果を海外紙に投稿した。審査中。Factors associated with community volunteer activities for developing a comfortable living environment for elderly subjects with dementia; considering factors to promote Caravan-mates activities. (Public Health Nursing)

(2)【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】

国際誌に掲載した論文は以下に示すとおりである。今後は平成 23 年度の研究成果報告会で発表した内容について国際誌に投稿する予定である。

Shimoyama, K, Chiba Y, Suzuki Y (2007). The effect of awareness on the outcome of oral health performed by home care service providers. Gerodontology, 24: 204-210.

Kang Y, Denpo Y, Ohashi A, Saito M, Tyoda H, Sato H, Koshino H, Maeda Y, Hirai T (2007). Nitric oxide activates leak K(+) currents in the presumed cholinergic neuron of basal forebrain. J Neurophysiol,98(6):3397-3410.

Toyoda H, Saito M, Sato H, Dempo Y, Ohashi A, Hirai T, Maeda Y, Kaneko T, Kang Y.(2008). cGMP activates a pH-sensitive leak K+ current in the presumed cholinergic neuron of basal forebrain.J Neurophysiol,99:2126-2133.

Chiba Y, Shimoyama,K, Suzuki Y.(2009).Recognition and behavior related to oral care caregiver managers in the community. Gerodontology,26(2):112-121.

Chiba Y, Sasaki A, Morita K, Otsuka Y, Nakayama T,et al.(2009). Effectiveness of care intervention related to ingestion and deglutition for the elderly using day services in the community.International Medical Journal,16(4):293-303.

Tohara H,Nakane A, Murata S, Mikushi S, Ohuchi Y, Wakasugi Y, Takashima M, Chiba Y, Uematsu H.(2009).Inter- and intra-rater reliability in fibroptic endoscopic evaluation of swallowing.Oral Rehabilitation,37(12):884-891.

Chiba Y, Shimoyama K, Suzuki Y. (2009).Recognition and behavior related to oral care caregiver managers in the community. Gerodontology, 26:112-121.

Chiba Y,Sasaki A,Morita K, et.al.(2009).Effectiveness of care intervention related to ingestion and deglutition for the elderly using day in the community. International Medical Journal, in press.

Kawanishi K, Koshino H, Toyoshita Y, Tanaka M, Hirai T (2010).Effect of Mastication on Functional Recoveries after Permanent Middle Cerebral Artery Occlusion in Rats. Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases, 19 (5):398-403

(3)【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】

グループでは、「櫻井」が、Society for Healthcare Strategy and Market Development の 2012 年大会で研究発表を行う計画である(2012 年 9 月開催予定)。また「阿保・花淵・池田」は、21 年度から 22 年度の研究成果を精錬し、World Cultural Psychiatry Research Review への投稿を、また研究成果の一部を、Japanese Society of Transcultural Psychiatry(JSTP), the World Psychiatric Association, Transcultural Psychiatry Sections(WPATPS), and the World Association of Cultural Psychiatry(WACP) の Joint Meeting に発表することを計画している。

<認知症の患者に対する予防活動や評価が行われたことは評価できる。症状は定型的なものや不定型的なものがあり、さらなる丁寧な取組が必要。>

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の可能性】において、一人一人の事例を扱って考察している。また【地域における住民参加型活動の開発と評価】においても、個別の意見を質的に

考察している。しかし【地域に暮らす高齢者の認知症対策としての予防活動】においては、今後、可能な限り個別性やパターンに留意して進めていきたい。

3. その他(選定時「留意事項」への対応状況等)

<ラットを用いた実験が果たして有効か>

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】(山田・平井・越野・内ヶ島・難波／千葉)

本グループの中では、ラットを用いた動物実験を実施した。この実験は、咀嚼機能と脳機能との関連についての研究の一環として行われた。すなわち、基礎研究に加えて、臨床現場からは、脳梗塞患者に対する口腔機能リハビリテーションの有効性や脳梗塞後のリハビリテーションにおける早期の経口摂食訓練プログラム適用の有効性が報告されている(紙屋克子, 1997;角町, 本多, 2005)。

本研究では、脳梗塞モデルラットを作製し、固形および液体飼料飼育が感覚運動機能障害と学習記憶機能障害の回復過程に及ぼす影響について検討した。実験には8週齢のWistar/ST雄性ラット36匹を用いた。脳梗塞モデルラットは、Longaら(1989)の方法に従い、Permanent Middle Cerebral Artery Occlusion(MCAO)を施した。術後2週間は液体飼料を与え、術後2週経過した時点で、固形飼料を給餌するMCAO固形群(n=13)と、液体飼料を給餌するMCAO液体群(n=13)、さらに偽手術後に固形飼料を給餌するSham固形群(n=10)の3群を設定した。体重測定および感覚運動機能の評価は飼料変更後から1週間隔で28日目まで行った。なお、感覚運動機能の評価にはLimb Placement Test(LPT)を用いた。次に、飼料変更後28日目に自発運動量の測定を行い、飼料変更後35日目より空間的学習記憶機能の評価としてMorris Water Maze Task(MWM)を行った。飼料変更後42日目にラットを屠殺し、脳を摘出し脳梗塞体積の測定のため、TTC染色を行った。

得られた結果は、以下の通りである。飼料変更後、MCAO固形群に一時的な体重減少が認められたが、その後すべての群において増加傾向が示された。LPTは、飼料変更後28日目においてMCAO両群ともに感覚運動機能の改善が認められたものの、MCAO両群間に有意差は認められなかった。また、自発運動量においてもMCAO両群間に有意差は認められなかった。MWMにおいて、獲得試行5日目の壁周辺を遊泳する行動(Thigmotaxis)の割合(Peripheral pool time)は、MCAO固形群に比して、MCAO液体群で有意な増加が認められた。これにより、MCAO液体群はMCAO固形群に比して空間的学習記憶機能の回復に障害を受けていることが認められた。なお、Thigmotaxisは線条体の尾状核被殻の障害によって増加することが報告されている(Devan et al., 1999)。脳梗塞体積では、MCAO両群間に有意差を認めないことから、安定した脳梗塞モデルラットを作製したことが裏付けられる。以上の結果から、脳梗塞ラットにおける固形飼育飼料の摂取が空間的学習、記憶機能障害の回復に有効であることが示唆された。

認知症高齢者の介護を実践する中で、ときには咀嚼・嚥下機能障害がないにも拘わらず、食形態をミキサー食などに変更している場合も少なくない。この原因の一つに、口腔機能アセスメントがなされていない、あるいは使用中の義歯およびそれによる咀嚼能力の評価がなされていないなど、歯科医師との連携が十分ではないことが挙げられる。最近の種々の報告にみられるように、認知症高齢者における軟食あるいはミキサー食の摂取が脳機能に大きく影響していることが示唆されている。本研究は、このことに対する一つの証左である。

実際、平成23年度の介入研究の結果でも、摂食機能や嚥下機能に対応する有効なケアがなされていたにも拘わらず、咀嚼機能を高めるようなケアが不十分であったことが窺えた。今後は歯科医療関係者(歯科医師および歯科衛生士)との連携を強化し、認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の改善に取り組む所存である。

紙屋克子. 経口摂取が意識回復過程に及ぼす効果. 口腔保健と全身的な健康, 60-63, 東京: 口腔保健協会, 1997.

角町正勝, 本多啓子. 脳血管障害患者に対する口腔機能リハビリテーションの介入時期別にみた口腔機能変化の評価. 老年歯学 20:169-179, 2005.

Longa EZ, Weinstein PR, Carlson S and Cummins R. Reversible middle cerebral artery occlusion without craniectomy in rats. Stroke 20:84-91, 1989.

Devan BD, McDonald RJ and White NM. Effects of medial and lateral caudate-putamen lesions on place- and cue-guided behaviors in the water maze:relation to thigmotaxis. Behav Brain Res 100:5-14, 1999